

学校改革の事例分析と比較考察

水越敏行

池田正浩・金城洋子・祖父江容子・寺嶋浩介・永野由美・山本宗正

Comparative case-studies on the school innovations

Toshiyuki MIZUKOSHI

Masahiro IKEDA, Yoko KINJO, Yoko SOFUE,

Kosuke TERASHIMA, Yumi NAGANO, Munemasa YAMAMOTO

Abstract

The Course of Study, which stipulates the teaching at primary and secondary schools in Japan will be revised in the year of 2002/3. In this revision, a “Period for Integrated Study (Sogoteki-gakushu)” and “Information Study (Jyoho)” will be introduced as a compulsory subject.

In this context, we first analyzed the case study reports published by primary and secondary schools in Japan to consider how they have been preparing for such a full-and-large-scale reform close at hand. After a careful examination of these reports, we then chose several experimental schools which seemed to show outstanding achievements in the following six areas connected to the revision of the national curriculum standard:

- 1) Information study
- 2) Collaborative learning
- 3) Integrated study
- 4) Elective subjects
- 5) School-based curriculum development(s) (SBCD)
- 6) Team teaching

Lastly, considering how these six factors work and affect each other in one and the same school, we took up several cases of primary and secondary schools, and tried to generalize the major findings.

問題意識と方法についての概観

世紀の変わり目を目前にして、教育の動きがにわかに高まり、変革の渦が大きくなってきた。教育課程審議会の答申を受けて、1998年末に義務教育学校、1999年春に高等学校の新しい学習指導要領も告示された。完全週5日制、教科等の時間や内容の3割削減、他方では情報教育が必修になり、教科には位置づかない総合的な学習の時間が、小学校から高校まで特設される。

明治5年の学制以来ともいわれる大幅な改革を目前にして、全国各地の学校はいま、どのような自己改革への動きを見せているのか。学校は保守的で、指示待ちの典型例だとされてきた。事実そんな例は随所にあるが、他方ではすでに長い年月を掛けて、学校のイノベーションを企画し、実行してきた学校も存在する。世紀を超えると、この格差が更に拡大していこう。

これらを確認するには、実際に訪問して、授業を参観し、教師や生徒に面談するのが確かな手であろう。しかし全国的な視野で、数多くの学校が試みてきた、また今試みつつある改革の実態を見るには、また別の方策が必要になる。学校の研究紀要や出版物を送付してもらい、それらを水越と大学院生とが分担して読み込み、その結果を持ち寄って討議していくことにした。それも漫然と感想を述べ合うのではなく、授業（教授－学習）システムを構成している諸要素の中から主要なものを取りだし、それらに重点を置いて分析する。次いでそれらの要素のつながり、関係を見ていく。そして類似の改革、特異な企画などを取り出して、検討する。

こうした検討会を繰り返した後で、注目すべき事例について、実際に訪問し、見学・聞き取り調査をしていく。あるいは広範囲の質問紙調査をかけてみる手もあろう。今回の私たちのまとめは、すぐれた事例を研究紀要などから分析し、視点を決めてまとめをしたもので、上記の全体的な研究の流れの中間点である。

(1) 今回全国の学校に依頼して入手した研究紀要、出版された書籍は、全部で73校である。その中から私たちが分析の対象としたものは、小学校が55校、中学校が13校、高校が2校、その他が3校である。これらの学校には、ホームページを立ちあげているところにはアクセスしても調べたし、一部の学校には直接訪問したり、授業研究に参加したりもした。

(2) 分析研究の視点としては、次のものを立ててみた。

*情報教育 *共同学習 *総合的学習 *選択学習 *独自のカリキュラム開発 *チームティーチング

これらについて、複数の小中学校の事例を取り上げて、比較したり一般化の方向性を考えた。

I 情報教育

文部省は、1989年に「情報教育のすすめ」を出し、従来からの個別学習のオートメーション化ではじまったコンピュータ教育利用とは全く異質な形で情報教育を再スタートさせた。その後をとってみてもすでに10年が経とうとしている時期になる。この間、情報教育を取り巻く事

情は加速度がついて変わってきた。それは、1つには技術面での飛躍的進歩が挙げられるであろう。OSがDOSの時代は、ひとつのアプリケーションしか起動しないシングルタスクの時代であった。当時の学校でのコンピュータ利用は、技術・家庭科でBasicを主としたプログラムの習得をならわせたり、ワープロの文字入力や二次元の図を描かせるのが一般的であった。しかし、OSとしてWindowsが登場し、CPUの速度やハードの記憶容量がすさまじい勢いで伸びるとともに、いろいろなアプリケーションが同時に使えマルチタスクとなり、パソコンは作業を並行して実施することが可能となった。たとえば、ワープロで文字入力をしながら別ソフトで同時に画像や音声の処理ができる。

また、ネットワークの形態も変わり、携帯電話やPHSなど無線型通信手段が普及し、それまでのパソコン通信に変わって、インターネットが急速にのびた。国策としてインフラ整備が施され、コンピュータをメディアの一つとして使用するネットワークの教育利用という観点が重視されるようになった。

そこで、学校にコンピュータが導入され、多くの学校ではインターネットの教育利用が盛んになり、ティーチングマシーンからコミュニケーション、コラボレーションツールとしてのコンピュータの可能性を探る事になった。1995年度から1998年度まで続けられてきた100校、新100校プロジェクトは最初の段階を終了し、ここで得られたノウハウや成果を、これから導入される学校に活かそうという次のステップに踏み出そうとしている。また、100校プロジェクトだけではなく、こねっとプランにおける様々な共同学習やNHK学校放送番組を中核に据えたホームページ上の交流学習など、様々なインターネット上の交流の場が増えてきたうえ、それに付随してテレビ会議システムによる共同学習も増えてきている。今回研究紀要を送っていただいた学校にはそういったプロジェクトに参加していた学校が多数あり、それらは一つひとつ本文に取り上げる意義はないが、研究紀要分析検討の過程においてしばしば取り上げられてきた。

情報教育に関するもう一つの大きな変化は教育課程における役割が大きくなってきたという点である。特に、高等学校普通科においては「情報」という教科が必修で設置されることが決まった。ここでは情報A（情報活用の実践力）、情報B（情報の科学的な理解）、情報C（情報社会に参画する態度）を展開させていく事になる。

中学校においても、技術・家庭科で展開される「情報基礎」を現行の3年生から低学年に繰り下げ、「情報とコンピュータ」として必修にすると共に、情報教育で培った力を学校教育において活かす事を意識したカリキュラムになってきているし、小学校においても総合的学習や各教科において展開させるという構想が将来的には練られている。

しかし、その一方で問題点もある。一つは情報教育がコンピュータに特化されがちであるという点である。情報教育の中核をコンピュータが担うのは間違いのない事であるが、他のメディアとの組み合わせや適宜選択をする中でその妙味が発揮されるのであるから、もう少し大きい意味でのメディア活用を考えないと、このままでは「新規性効果」に陥ってしまう危惧があ

る。もう一つは特に小学校において依然として情報教育の位置づけがはっきりしない、という点である。また、小学校から中学校、高等学校への段階を踏まえた情報教育の展開が見えてこない。

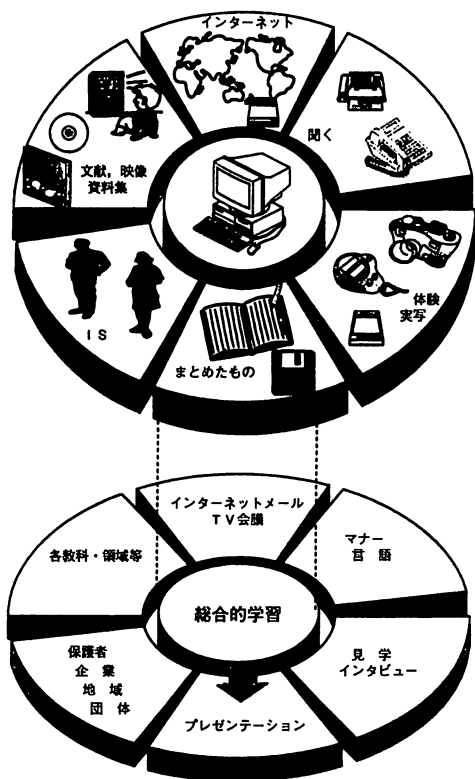
本項では情報教育を推進している小学校と中学校、各1校ずつをとりあげ、情報教育のカリキュラム展開やネットワークについて見ていこうと思う。なお、今回行った学校の研究紀要分析において、情報教育の中でも特に今後注目されるであろう、「共同学習」はⅡで取り上げているので、そちらも情報教育の一部として本項と共に参考にされたい。

1. 徳島県三加茂町立三庄小学校

同校は1996年度から2年間文部省より指定機器利用の研究委嘱を受け、「自ら学び、主体的に生きる力を培う情報関連機器活用の学習を追求しよう」という研究主題のもと、総合的学習の時間を中心としたメディア活用を通しての情報教育を試みてきた。同校の情報教育元年は1993年度で、中古パソコン三台（NECVM2, RX, x12）を、学校の資料室においたところからスタートしている。早いスタートではないし、その上、新整備計画前とはいえ学校に中古パソコン三台というのは、決して恵まれたメディア環境でもなかった。ただ、メディア環境は、いずれ整備されるものであり、注目すべきは、短期間にして積極的に情報教育が展開されていった点にある。現在では、マックやDOSのパソコンを含めると62台設置されている。

(1) 情報教育と総合的学習

それではまず、情報教育と総合的学習がどのように位置づけられているのかを明らかにしておきたい。総合的学習のイメージ図が（図1-1）にあたる。総合的学習を取り巻くのが単に各教科ではなく、インターネットメール等の交流の道具であったり、マナーなど社会において必要とされるものであったり、情報を扱う能力の集大成ともいえるプレゼンテーションであったり、保護者や企業、地域や団体などの人材・機関と、多種多様である点に特色がある。総合的学習の柱となっているのが「情報教育」であり、その学習を支えているのは、各種メディア機器のみでなく、IS（Information Supporter=専門的立場から子どもたちに学習情報を伝達してくれる人。主に保護者。あるいは、インターネットメールでの提供者）であったりする。このような人的なものを含むネットワークづくりを短期間で三庄小学校が成し遂げたことは、驚くほかない。これは、学校全体がまとまっているのは当然だが、管理職のリーダーシップも強く働き、かつ、そこで働く教員が地域に対して開放的であり、教育委員会も物心両面で積極的に学校を支援している体制が読み取れる。



(図 1－1) 総合的学習とメディア活用の
全体イメージ図

1997年度の情報教育の目標は次の通りであった。

- (ア) 自分の疑問を明らかにし、それらを様々な方法で調べ、情報の活用できる子ども
- (イ) 他人のものを大切にしようとする心情や態度を持ち、著作物への関心の高い子ども
- (ウ) 物事の調べ方やまとめ方等が分かり、必要な情報を手順よく集めることができる子ども
- (エ) 初めてのアプリケーションやメディアを、積極的に使おうとする意欲をもったメディアリテラシーの定着している子ども
- (オ) 情報発信を考えた責任ある発言や発表ができ、相手にわかりやすく伝えることができる子ども

以上を見ても分かる通り、情報機器の操作を習得だけではなく、それを通していかに有効な情報の発信や受信を行うか、ということに重きが置かれている。

そういった情報教育を展開させながら一方で、保護者の協力を得ながら教師自らシステムを構築したり、リテラシー習得のための集中配置と、各普通教室での常時利用のために分散配置をするなど、情報環境にも工夫が見られる。こうした積極的な情報教育の推進の裏にはITの加配教員の存在が非常に大きいと思われる。教師、という観点でいうと、ITの推進以外にもTTに関して力を入れており、メディア操作支援のメディアサポーター、特定分野のエキスパート、授業計画を主とした授業プロデューサで授業構成を考えながら、主な授業教師である授業コーディネータが授業を設計している。

(2) 情報教育の授業展開

それでは実際に情報教育がどのように展開されているのか、高学年の総合的学習から、その事例を取り上げてみたい。

5年・総合的学習「人と川」

「環境」を総合的学習の柱にする事例は珍しいことではないが、三庄小学校の総合的学習は、4、5年に特色ある授業がなされている。

それは、「水」を主題として展開される。自分たちが飲んで「水」を調べるために浄水場に行きデジタルカメラやビデオ、Eメール、スキャナなどさまざまなメディア機器を活用し調査していく。その日課を他校と交流するためにテレビ会議システムを使ったり、浄水場の専門家（IS）も導入している。その中で「くらしのなかの水を守ろう」という国語関連授業へとつなげて「水はどこから」、「ペットボトル1本の水で生活してみよう」「水はつくられる」「水（川）のよごれはどうなるの」「水についてもっと知ろう」の5つのテーマで11時間の授業を費やし道徳、社会、国語、理科、特活の各教科と関連させてすすめているのである（クロスカリキュラムとしての環境教育）。

特に、三庄小学校の機器利用研究の本領が発揮されているのは、5年の社会科での総合的学習で「人と川」という単元のもと、地域の吉野川をとりあげているところである。

この授業は、全17時間で吉野川はほんとうにきれいかどうか、水質調査、ゴミ調査をし同じ研究をしている愛知県の広瀬小学校とテレビ交流学習をして、児童は環境問題の学習方法論というべきものを身につけていく。調べ方は、上流、中流、下流について、地域を分け、おのおの水質や水生生物、ゴミ、なかでも身近なビニールや生活排水、下水処理方法調査に重点をおく。そして昔の吉野川についてお年寄りに聞き取り調査をした上で、川の自然を守る運動につなげられていくのである。そして最後に児童は、相手によくわかるようにまとめて発表する技術を身につけていくよう指導されている。このような身近な例を出発点として、メディアを利用した環境問題学習の方法論は6年で森や砂漠等さらに大きな自然の環境保護問題調べ学習に発展する。⁽¹⁾

2. 大阪府松原市立松原第三中学校

(1) 小中の連携と情報教育

同校は1996年度にマルチメディアパソコンが42台導入され、こねっとプランによるインターネットの導入により、新しい情報教育の取り組みが始まっている。先ほどの三庄小学校同様、情報教育の研究史に関しては特筆すべきものがないが、校区内の松原中央小学校、^{ぬのせ}布忍小学校とともに3校合同で行われる研究会は5年前から開始されており、近年は情報教育の推進を中心に小中連携の道を模索している。おそらく全国の小中学校において、このような研究活動が見られるケースは皆無に近いであろう。この地域には、長年続けられてきた人権学習の成果が情報教育にも反映していることが読み取れる。

松原三中での情報教育の取り組みとしては、次の3点があげられている。

- (ア) 学習内容を豊かにする道具としてのコンピュータを小中連携で模索する
- (イ) 人権と共生のネットワークづくりに情報教育を結びつける

(ウ) 生徒たちの学びのネットワークをインターネットで拡大する

学校教育 9 年間を通して、情報教育やメディアリテラシーを「螺旋的」に高めていくこと、松原三中学校下の全教師が、この新しいカリキュラムや企画に関心をもつようになり、教育委員会と一体になっての開発研究ができているところにも注目すべきであろう。

現に毎月一回くらいの割で、三校合同の授業研究、コンピュータの実技研修などが積極的に行われてきている。研究の成果として、小学校におけるコンピュタリテラシーの目安を作成したり、授業においては児童と生徒の交流活動、テレビ会議システムを用いた遠隔コラボレーションの試みも行われている。日本の情報教育の歴史はまだ浅い。しかし、数年後に小学生から情報教育を受け続けた子どもが中学校へ上がってくることを考えると、こうした小中を見通した取り組みが重要となってくるのは間違いない。こういった研究体制を支えるのが、情報教育を推進する担当教員のリーダーシップである。そして、「限られた教科においてのみ展開される情報教育ではない」という考えをあらわにしているところから、1 人のリーダーシップだけでないということも読み取れる。実際に同校に張り巡らされている手づくり LAN のケーブルを見れば誰もがそう感じるであろう。

(2) 総合的学習の中における情報教育の展開

同校に関してのもう一つの大きな特徴は 1970 年以来の人権・部落問題学習である。これが現在の総合的学習や情報教育を支えている。「教科発展型総合学習」2 つを設定し、選択履修の「クリエイティブタイム」と学活の時間にコース選択で行われる「ヒューマンタイム」がある。

① クリエイティブタイム

教科学習をはじめとする学習の基礎基本を大切にしながら、豊かな体験→多彩な表現→人とのつながり→自分らしさの発見と広げて「情報」、「環境」「国際理解」「人権・福祉・共生」を柱として取り組む事によって「豊かな学力」をつけること目指している。2・3 年生でそれぞれ 10 コース程度の講座を開設して、生徒の選択により前・後期の 2 期制で展開させている。

例えば、2 年生前期の「わたしも童話作家」というコースでは、14 時間をかけて、

(ア) コンピュータを使って絵本づくり

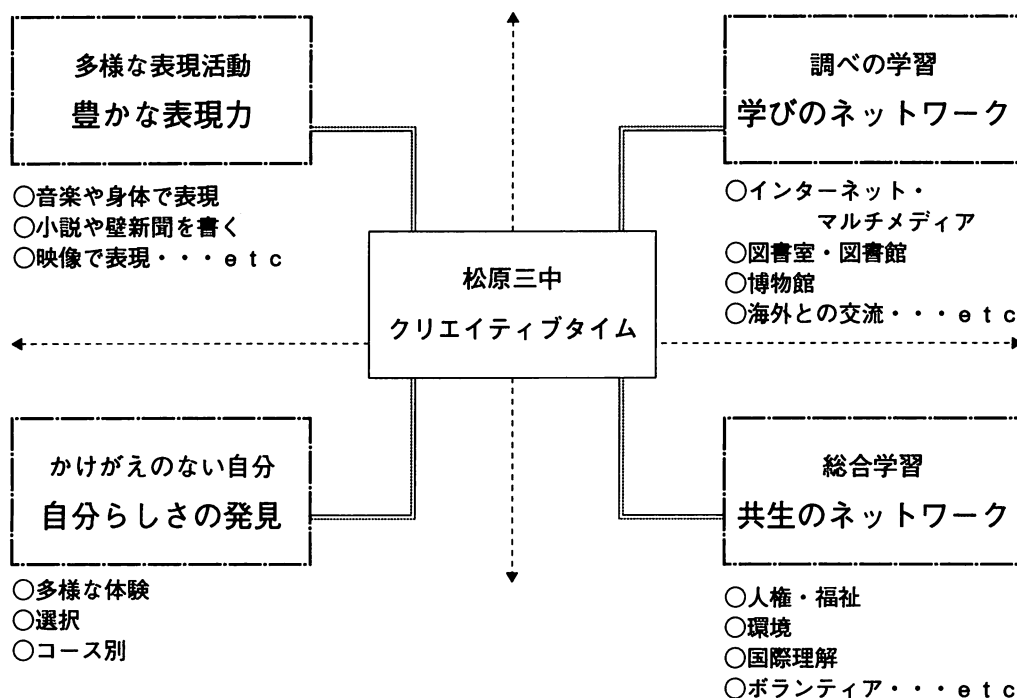
(イ) できあがった作品を校区の幼稚園や小学校に贈る

(ウ) 幼稚園を訪問して絵本を読んで聞かせる

というように、自ら作った絵本を異学年、異校園種の児童園児に披露することにより交流する。このような授業設定の中で、反抗気味の生徒が園児を抱き上げて話しかけるという場面もあり、中学校にとっては貴重な体験となっている。小学校にとっては、先輩たちの作品にふれることで、進学に対する夢や希望、あこがれをもつことができるというように、双方がメリットのある活動となっている。

また、先ほど「豊かな学力」が目標の 1 つであると記述したが、学びと共生のネットワーク

として、(図1-2)のように4つの要素を掲げ、クリエイティブタイムの中での情報教育の展開を通して、それが保障されるように、と考えている。



(図1-2) クリエイティブタイム・学びと共生のネットワーク 4つの要素

② ヒューマンタイム

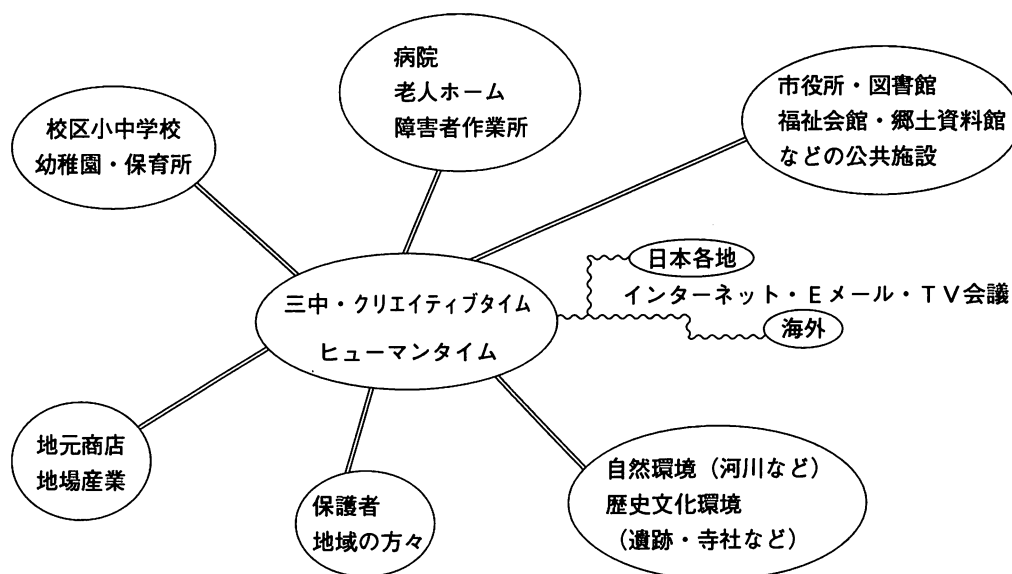
クリエイティブタイムと対を成し、「豊かな人権意識」を育む学習である。1～3年生の道徳・学活のカリキュラムに沿って行われる比較的短期の生徒選択によるコース別人権学習である。フィールドワークを重視し、学期単位で地域学習、ボランティア体験学習、国際理解学習などが展開される。その中で、インターネット活用やインタビュー、古文書調査などの学習が展開されている。

③ 地域との連携

ここまで読み進めてくるとわかることは、同校のカリキュラムには地域との関係が色濃く反映されているという点にある。同和教育としての総合学習を積み重ねてきた同校はその地域性に特色があり、クリエイティブタイムやヒューマンタイムもその例外ではないと考えている。地域に学校を開き、そのネットワークの中で学習を進めていくことを考えている。(図1-3)を見ても、同校の情報教育にその地域性が関わってきているということがわかる。

(表 1－1) ヒューマンタイムのテーマ

1 年	1 学期	「松原探検」(地域学習)
	2 学期	「人権・福祉の街づくり」(地域・歴史学習)
	3 学期	「ちがいを豊かさに、ノーマライゼーション」 (ボランティア体験学習)
2 年	1 学期	「ちがいを豊かさに、地球市民をめざして」 (多文化共生の国際理解学習)
	2 学期	「ハローワーク」(将来を考える職場体験学習)
	3 学期	「ちがいを豊かさに ジェンダーフリー」 (男女共生についての学習)
3 年	1 学期	ナガサキ修学旅行(平和学習)
	2 学期	将来と進路についての学習
	3 学期	「人権と共生の街づくり」(まとめ)



(図 1－3) 2つの総合学習と地域との関連

(3) パソコンリレー授業

ここまでは、総合的学習の中での情報教育の展開であったが、同校のもう 1 つの特徴としてパソコンリレー授業がある。これは、コンピュータはすべての授業で、切れ目なく活用されなくては意味がないという同校の方針によるものである。

例として、1 年生の 5 月に技術・家庭科「情報基礎」でコンピュータの基礎的な使い方や機

能をマスターしたり、その次に国語科でローマ字入力とワープロソフトを集中的に実施するなど、それ以外の教科は月によって割り振りする。たとえば社会科で松原を紹介するホームページを作るであるとか、体育科でのサッカー練習プログラムの作成があげられる。

技術、国語以外の教科では、教科の希望によりコンピュータ活用授業を割り振り、コンピュータを活用した授業がとぎれなく続くように計画されている。

このように、同校は80年代からの「小中連携」、94年からの「中学校区のネットワークづくり」を活かして、地域を巻き込みながら、さらにはインターネットで交流範囲を拡大させている。「人権」を柱としメディアを利用しながら、様々な体験をまじえ、仲間づくりへと発展させ、今までの教科学力を基礎に時代の変化に対応できるより豊かな学力を培うのが、松原第三中学校の情報教育といえる。^{(2) (3)}

Ⅱ 共同学習

2001年をめどに、全ての学校にインターネット接続されるなど、教育現場におけるネットワークの導入・整備の動きは非常に早い。それに伴い、Iでも少し触れたように、教育現場における情報化の可能性を探る100校・新100校のプロジェクトが起爆剤となり、他の様々なプロジェクトが生まれ、ネットワークを通じた共同学習の試みが数多くなされてきた。外部に学校を開く、という新しい学力観において、ネットワークによる共同学習にも1つの可能性がある、という結論が出たといつて良いであろう。そういった意味では、もはや実験的な取り組みや、普及そのものを目的としたような実践の段階は終わったと言える。

今後、さらなるネットワーク技術の発達に伴って、共同学習を単元にどう位置づけたり、具体的なコンテンツをどうするかといった問題がクローズアップされてくるであろう。本項では、そのような中、共同で学習を進めることの本質的な意義を見出し、積極的な取り組みを行っている学校について取り上げる。

1. 共同学習のタイプ

学校の事例について取り上げる前に、現在の共同学習の特徴を利用されるインフラによって3つにカテゴリー分けしてみた。

(1) インターネット上での取り組み

インターネットは情報検索で用いられる場合が圧倒的に多いが、共同学習においては、実際にホームページ上にプロジェクト立ちあげて、電子メールで外部の学校や人材と交流したりはもちろんのこと、ブラウザ上で動くチャットや電子掲示板で情報交流をしたり、場合によってはあるテーマに基づいたディスカッションをしているという事例も見受けられる。

共同学習にWebを用いることの利点は、従来のクラス単位、学年単位の枠を取り払い、時間の拘束からもある程度開放されるという点、また、生徒の興味関心に応じて学習の場を細かく分けて設定できるという点も挙げられている。さらに外部人材との情報交換や、学校外の多くの目に触れることで、自覚や責任、モラルやマナー、効果的な表現方法などについて学ぶことに繋がってゆく可能性もあり、実際にそういったことも紀要の中にいくつか見られた。

(2) LAN（イントラネット）上の取り組み

基本的に閉じたネットワークであるため、学習グループは学校内に限定されるが、回線が高速な分、より複雑なプログラムや、画像、音声をふんだんに使ったマルチメディア教材などを扱えるのがイントラネットの強みである。学習を進めていく中で、個々に収集してきた写真や音声の情報をパソコンに取り込みデジタル化し、イントラネット内でそれらを共有や参照、検討し合うということもできる。市販されているグループウェアを使って共同学習を円滑に進めている例もあった。イントラネット上におけるホームページの公開についても、外部に公開するよりも詳しく情報を公開できたり、同じ学習をしている児童のニーズに応えやすい、という面もある。そういった意味では、インターネットへ出て行く前の事前練習の場としての利用という事も考えられよう。

(3) テレビ会議システム（SCS、フェニックス等）を用いた取り組み

SCS（Space Collaboration System）は通信衛星で一度に複数の場所へのデータ送信が可能、それに対しフェニックスは高速専用回線で1対1を結ぶという違いはある。しかしながら見た目はテレビ会議システムということで、ここでは同じものとしてまとめる。

テレビ会議システムがインターネットやイントラネットと根本的に異なっている点は、そのデータの送受信がリアルタイムに行われるという点である。従って本番までに各学校ではその高価な通信方法で何を扱うかという念入りな計画が必要となってくる。送られてくるデータは映像、音声を伴う。相手と実際に会話をすることができるし、歌を聴かせ合ったり、ダンスを踊って見せ合ったりということも実際に行われている。また、外国語教育などの用途でも実際に海外の生徒と習得した第2言語で会話するといった方法で利用される。今後は1回のイベントで終わる事のない中身のあるコンテンツがますます必要になってくる。

1. 共同学習を行っている学校の例

(1) 福井県福井市立春山小学校

1988年度からCAI学習の研究指定を受け、今日まで一貫して「自己教育力の育成」をテーマにコンピュータの教育への効果的な利用法を模索してきた学校である。1995年度以降は、100校プロジェクトへの参加によってCAI中心のコンピュータ利用から方向転換し、より今日的な情報教育の取り組みがなされている。情報教育を進めていくにあたっては、10年前からのCAI

学習で培ってきた財産をそっくりそのまま捨ててしまうのではなく、コンピュータの操作を教える場合にうまく流用してきている。

また、操作の練習ばかりではなく、言葉による表現を重視し、3年生では毎日、朝の会で5W1H（When, Where, Who, What, Why, How）をチェックしながら、スピーチの原稿を作ったり、日記として短文を書くことを通して能力の育成を図っている。それを踏まえて4年生ではWeb上の電子掲示板システム（BBS）やチャットを使ってネットワーク上のコミュニケーションの練習をし、その後、様々なプロジェクトを通じて他校の生徒とも交流する、というような段階的なカリキュラムが構成されている。

①4年「おはなしやりとり」

核家族化に伴い、人間的な付き合いが少なくなってきたという児童の実態を背景に、掲示板やチャット、メールなどを利用して、多くの仲間とのコミュニケーションを図ることが、この取り組みの目的となっている。同じ学級内や学年内での馴れ合いのコミュニケーションを避けるため、コミュニケーションの相手を学外に求めた。その際に、共通の話題が必要であるとして、同一教材を扱っている学校の児童を相手に選んでいる。具体的には国語科で扱った物語の続編を生徒たちで考え、それに絵を付け、パソコンで紙芝居形式に加工してホームページで発信する。同小学校では、事前に電子メールを使って他校と交流の練習をしたり、他の学校のホームページ上にある電子掲示板に書き込みをしたりして、交流相手を確保しているので、そのような相手校の生徒から、作品を見た感想が同小学校の掲示板に寄せられている。

児童たちは作品に対する様々な論評を読み、自分たちの作品を振り返るとともに、感想を寄せてくれた児童たちに返事を書いて、学外に仲間を作り、その後も方言や郷土の伝統産業についてのテーマを持って共同学習を展開している。目標はコミュニケーション活動ではあるが、国語の教材という児童の共通体験が、中身のある学習を展開させた例であると言える。

②6年「春山環境ウォッチング」

6年生になると単にコミュニケーションすることだけを目標とするのではなく、意欲的な情報収集や情報発信、あるいは情報交流を通して課題解決能力の育成を見据えた授業が展開されている。1学期「環境ウォッチング」においては、新聞・雑誌・インターネット等を通して一人ひとりが個別に情報収集する。それらを元に興味関心別にグループに分かれて調査活動を行う「春山環境ウォッチング」、これを2学期に行う。そこで調べたことや環境問題に対する自分たちの思いや願いをホームページの形でまとめ、発信し、広く仲間からのフィードバックを得るとともに、100校プロジェクトやこねっとプラン等が運営している遠隔共同学習の掲示板へ進んで投稿し、交流を深めるという「環境でコミュニケーション」、これを3学期に行う。それぞれ国語、理科、道徳、家庭科、特活、ゆとりの時間などを利用して進めている。

内容は、地域のリサイクル活動を調べるものだったり、用水路のゴミや水質の状況を調べる

ものだったり、川の生態系をもとに水環境を調べるものだったり、あるいは、学校周辺のゴミの状況から、ゴミの臭いについて実験したりするグループなど、様々である。中でも、酸性雨のグループは共同学習のプロジェクト「いろんな水溶液調べ」に参加し、全国の参加校のデータと共に、交流をしながら学習を進めている。ここにおいても、既存のプロジェクトグループが大きな役割を持っている事が読み取れるであろう。今後は、このようなプロジェクトが今まで以上に量的にはもちろん、質的にも多様性を帯びるようになる事が期待されている。⁽⁴⁾

(2) 横浜市立本町小学校

1985年あたりから年1回の自主的な研究公開がなされ、研究出版物もある。早くからオープンスペースを取り入れていった学校として有名であるが、何よりも、100校・新100校プロジェクトにおいては中心的な存在であり続けていたため、全国からの見学者も後を絶たない。

同校は、オープンスペースやコンピュータ等情報機器のハード面での改革、カリキュラムやITなどの指導面を含めたソフトウェアの改革を学校改革の柱とおいた、「マルチメディアプロジェクト学習」を中心に研究を進めている。その中で多様な情報機器を扱いながら、情報活用能力や表現力、コミュニケーション能力の育成を目指している。

①2年「生き物との生活をはじめよう」

高層ビルの立ち並ぶ横浜市の中心に位置する本町小学校では、稲が実際に育つ様を観察したり、実際に育てるといった活動は非常に難しくなる。しかしながら、ここではバケツの水田に稲を、発泡スチロールの畑に野菜を植え、屋上やベランダに置いて育てるというひとつのアイデアから、実際に学習が進められた。

児童たちは試行錯誤で野菜や稲について調べるが、稲に関しては詳しい資料に出会えなかったため、神奈川県農協青年部の人々に稲を育てるアドバイスを求める等の活動を行っている。稲の育て方がわかった段階で、その成長記録をホームページ上で発信し、稲の成長に合わせてその内容も随時更新していったようである。このことが後に和歌山県の熊野川小学校の2年生と交流する事につながっている。

熊野川小学校では実際の水田で「たんぼ水族館」という取り組みがなされており、稲の成長の様子を互いに比べてみたり、質問を寄せ合う形で交流が進む。「なぜバケツの中で稲を育てようと思ったのですか」、「稲はバケツで出来るのですか」などと質問する、自然環境に恵まれた熊野川小学校の児童と、都会の真ん中にある本町小学校の児童とのズレをもとに、比較する事によって共同学習を成立させている。⁽⁵⁾

また、熊野川小学校との交流は全学年を通して計画されており(表2-1)、1998年度で3年目になるが、実際に1年生から5年生までの交流活動がされている。共同学習との関係だけではなく、それをきっかけに人間関係を学ばせる、ヒューマンネットワークとしての意味もこの交流学习には含まれている。まだ、その試みを6年間通した児童もいないし、6年時にお

ける修学旅行の運営等の障害も有るだろうが、今後の更なる成果に期待したい。⁽⁶⁾

(表 2-1) 熊野川小学校との全学年交流活動

1 年	出会い
2 年	稲栽培交流
3 年	町調べ交流
4 年	環境比較交流
5 年	生物比較交流
6 年	交歓修学旅行

②全校活動「よみがえれ！青い目の人形『ブロッソソ』」

戦前、日米友好のために、アメリカから日本各地に1万2千体以上贈られた「青い目の人形」が戦争時、敵国の人形であるとして次々と破壊されていったという事実がこのプロジェクトの歴史的背景として存在している。

戦後、心ある人々によって守られた人形が発見され、現在全国で約280体が確認されており、その中の1体、「ブロッソソ」が本町小学校にもあったということが、校長室に飾られた写真から判明し、その後、インターネットクラブの生徒が津市立平野小学校のホームページ上で青い目の人形が学校に里帰りしている情報を見つけたことで、この取り組みが本格的に動き出している。

同校ではインターネットクラブを中心に「青い目の人形のページ」をWeb上に設け、それをきっかけに、全国から青い目の人形に関する情報が寄せられるようになってきている。愛知県、埼玉県、愛媛県、富山県の学校などからも同様に「青い目の人形のページを作ったからお互いにリンクをはりましょう。」というメールが届き、1999年3月現在、20の学校と民族資料館など2ヶ所が相互リンクで結ばれている。目的や対象がかなり限られるプロジェクトではあるが、限られるからこそインターネット上で出来るユニークなプロジェクトであると言える。今後は翻訳の壁を取り払い、アメリカ側との国際交流に発展させる道を模索している。

インターネットを使った取り組みは数多くの学校で見られるが、このような、インターネットを使うことで初めて実現できる学習というものはなかなか見つからないのが現状のようである。このプロジェクトに関しては、扱う題材も歴史的背景を孕んだ貴重なものであり、また、共通の問題意識を全国の学校と共有できたという効果も見過ごすことはできないであろう。

③6年「イメージをふくらませて『やまなし』の世界を表現しよう」

宮沢賢治の詩「やまなし」の中で、「音」「絵」「言葉」「動き」といったマルチメディアのいくつかの要素が意図的に絡み合わされたこの実践を、同校の研究を支援している田中博之・大

阪教育大学助教授は、「もっともマルチメディアプロジェクトらしい」として紹介している。⁽⁷⁾

具体的には、水彩画ソフトウェアを使って「やまなし」の世界を表現し、その作品を体育館の大型スクリーンに映し出しながら、バックで音楽を演奏し、そのなかで身振り手振りを交えた朗読を行うという、表現力やコミュニケーション能力の育成に重きをおいた学習が、「マルチメディアプロジェクトらしい」ということができるであろう。その学習の中で、企画・制作・リハーサル・上演・鑑賞という一連の活動を行うことになるが、グループ内で、子どもたちがそれぞれ、シナリオライター、作曲家、演奏家、ストーリーテラー、コンピュータプログラマー、画家、ディレクターといった具合に役割を分担し、演じる。こういったグループ学習の形態がこの実践を支えるものとなっている。

Ⅲ 総合的学習

2002年度からの新学習指導要領において新しく設けられた「総合的な学習の時間」は、地域や学校の実態に応じ、学校の創意工夫を生かして実施する時間とされているが、先行的に実施している学校では、さまざまな試行錯誤を繰り返しながら学校独自で、教科等も含めて教育課程を編成してきた。家庭や地域との交流を工夫することで学校を外部に開くなど、今までの学習観からの脱却を試みるような様々な実践が報告されている。その中で、基本姿勢として共通している「子どもが主体であること」もその活動実態は、多様で、実にさまざまな取り組みがなされている。

例えば、千葉県立打瀬小学校では「うたせ学習」と呼ばれている総合的な学習の取り組みがなされている。

このうたせ学習は、低学年うたせ学習・うたせ学習A・うたせ学習B・うたせ学習Cの4つに分類されていて、低学年（1～2年）においては生活科を核に他の教科を取り入れた学習の低学年うたせ学習が実践されている。3年～6年において実践されているうたせ学習Aは、「はじめに内容ありき」の立場を取り、複数の教科内容で共通化できるものを互いに関係づけた横断的な学習である。うたせ学習Aと平行して3年～5年までは、「はじめに子どもありき」の立場をとって、教科の枠は意識しないで、テーマを設定し、追究していくうたせ学習B、そして、うたせ学習の集大成としてのうたせ学習Cは、6年生対象で卒業研究として個人がテーマを設定し、追究する学習である。このような構造が考えられその実践が報告されている（図5-1参照）。総合的学習の学習形態においては、ほとんどの現場で、今までのような一斉画一的授業形態の学習形態から、実体験や体験的な学習、問題解決的な学習形態を重視していることも、特徴的である。⁽⁸⁾

【1・2年】	【3年～5年】	【6年】
低学年 うたせ学習 生活科を核に他の教科を取り入れよりダイナミックな活動をねらっている学習です	うたせ学習A 《はじめに内容ありき》 教科の学習を効果的に進めるために、複数の教科内容で共通化できるものを互いに関係づけた横断的な学習です	うたせ学習C [卒業研究] うたせ学習の集大成として、自分を高めるためのテーマを個人で設定し追究する学習です。
	うたせ学習B 《はじめに子供ありき》 教科の枠は意識しないで、子供たちの思いや願いをもとにテーマを設定し、追究していく総合的な学習です	

(図5-1) うたせ学習のカリキュラム編成

子どもひとりひとりに「生きる力」を育むために、「いかに変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」を育成するために、子どもたちに情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身につけることをねらいとして「総合的な学習の時間」は考えられている。このことを実現するために教師は、教育現場の実践の中でどのような子ども像を描き、教育課程が編成されているのか、学習展開はどのようなになっているのかなどの視点から、総合的な学習についての具体的な取り組みを、香川県坂出市立坂出中央小学校、東京学芸大学教育学部附属大泉小学校の学校紀要の中から見てみたい。

1. 香川県坂出市立坂出中央小学校

1872（明治5）年に「坂出学校」として設立され、127年目を迎える歴史ある学校である同校は、1976年から3年間、文部省の研究開発学校に指定され、生活科の先駆けとなる総合的な学習を実施した。国際化・環境・情報化・人間の視点に立ち、人間形成としての総合的な学習を試みている。1997年度から2年間、坂出市教育委員会から教育課程の開発指定を委嘱され、『『生きる力』をはぐくむ教育の構想』と題して、社会科・生活科学習と総合的な学習における問題解決能力の育成が図られている。

総合的な学習の大きな柱となるとされている「国際化」「環境」「人間」「情報化」の4つの視点から学習内容を再構成した上で、体験活動を通して問題解決能力や人間性を養うという研究構想であるが、この実現のために様々な試みがなされている。

(1) 総合的な学習の推進

「中央タイム」と呼ばれる総合的学習の時間が設けられ、第1学年から第6学年まで関連付けられたテーマ・重点項目を設けた活動を行っている。以下（表5－1）にその内容をまとめる。

（表5－1）各学年における総合学習のテーマ（●印が重点的内容）

学年	総合的学習 单元名	国際 化	環 境	人 間	情 報 化
第1学年	「西大浜公園であそぼう」	○	●	○	○
第2学年	「野菜物語をつくろう」	○	●	○	○
第3学年	「たんけん ゆめのまち坂出」	○	○	●	○
第4学年	「久米通賢とふるさと坂出」	○	○	●	○
第5学年	「広がれ！瀬戸大橋ネットワーク」	○	○	○	●
第6学年	「サウサリートを旅しよう」	●	○	○	○

第1学年では、環境に重点を置いた総合学習の時間が91時間設置されている。自然の様子に関心を持つように公園で遊ぶという活動と共に、幼稚園児との交流も図られている。同様に第2学年でも環境を重点項目とし89時間が設けられ、第1学年での総合学習を受けて「ふれあい農場」で野菜を育てるという経験を通し、地域の独居老人や1年生との交流も図られている。このように、低学年では人間や自然とのふれあいを通して、豊かな心を育む土台を築く活動がなされ、それらを受けた中学校では人間領域が重点項目とされ、調べ学習を中心とした活動がなされる。第5学年になると情報化を、第6学年では国際化を重点項目として、全学年での学習内容を活かした課題設定がされている。

実施時間は、1～2年生で週1時間、3～6年生で週2時間であるが、加えて各教科、道徳、特別活動などと総合的学習との関連を図っている。教科では主に社会科や生活科での調べ学習が挙げられるが、道徳の時間に体験活動が重視されており、幼稚園児との交流の場を設けたり、環境について考えたりといった試みがなされている。「道徳的实践力を育成」として、他者との触れ合いや自分の感じたことを表現しながら、社会生活の中で人が請け負っている役割を考えたり、自分の問題意識を高めたりといったことが目指されている。加えて、授業時間の弾力化を図るノーチャイム学習が実施されている。45分の単位時間を2限続けての利用が可能であり、また土曜日の学校裁量の時間（2単位時間）を利用して、まとまった時間設定を可能としている。

これらの総合的学習の実施に際しては、学級・学年・複数学年・複数教科・全校の各組み合わせによる教師同士の多彩なチーム・ティーチングの活用だけでなく、地域人材ボランティア

アを募り、ゲストティーチャーとして招くなど、教授組織も多様化している。学習形態に関しても、流動性を確保するように努力されており、特に特別活動においては、地区別で14の異年齢集団に分け、集団内の経験を通して対人関係が豊かになるように継続的な計画がなされている。

① 3年「たんけん ゆめのまち坂出」(時間数82時間)

この学年では、地域の人々の願いや思いを考えながら、地域の一員として積極的に関わっていく姿勢を育てると共に、自分達の生活する町について意欲的に考え、友達との交流と表現・発表活動を行うことが目標とされている。

まず、1学期には、実際に町の様子を観察して現状を把握する。坂出市の「みどりマップ」を作成して、今後の町作りについて考えたり、自分は町作りにどのように参加できるかを考えながら、夏休みを利用して市内の施設や土地の様子を見学してまわり、「ゆめのまち」構想を膨らませる。2学期には、坂出市民へのインタビュー調査を行う。自然・文化・商業・流通の各ゾーンにグループに分かれ、それぞれの土地の様子や施設見学を行ったり、公共施設を利用している人や市役所の人に話を聞き、現在の問題点や改善方法などを話し合う。この時期に、地域環境の美化を図る奉仕活動(ボランティア・クリーン作戦)が実施され、その活動の中においても地域との繋がりが強化される。3学期には、調べてきた内容を立体模型にして、さらに参考資料を集め、模型を修正する。最後に「中央小児祭り」で発表という形にまとめ、最終的には市役所へ「ゆめのまち」願いの実現をお願いする手紙を書く。

単なる空想としての町作りではなく、自分達の生活している地域の抱える問題を知り、より地域への関心を高めながら、意見交換やプレゼンテーションといったコミュニケーション技能の育成も図られていることが見受けられる。地域の歴史学習、手紙などの書き方、人との話し方、道徳的問題など、教科の特徴も上手く盛り込まれたカリキュラムとなっている。

② 5年「広がれ瀬戸大橋ネットワーク」(時間数70時間)

坂出市に瀬戸大橋開通後どのような変化があったのか。生活・環境の変化を調べながら地域を思う心を育て、より多くの触れ合いを通して、より豊かな表現力を育むという目標が設定されている。

1学期には、瀬戸大橋の長さや名前の由来、工事中の工夫などの概要から、自分が興味関心を持ったことについて調べる所から始まる。坂出市街地の人々と、橋脚の島の人々との触れ合い活動を通して、インタビューからそれぞれの思いの違いを探る。そして橋脚の島の児童に伝えたいことをまとめ、テレビ番組を制作する。2学期には、瀬戸大橋完成後の生活の変化を調べる。坂出市街の生活圏拡大、観光客の増加、流通業など産業面の活性化など瀬戸大橋の恩恵と共に、高い通行料金、自然破壊、交通公害などの問題点もグループに分かれて調べる。それに並行させて、テレビ局を訪問し、番組の制作過程を学びながら情報・通信の大切さを知る。そして、現在の瀬戸大橋が果たしている役割が、完成前に住民が抱いていた願いとどのように

結びついているかを再度テレビ番組にする。3学期には、瀬戸大橋からの発展として、世界の橋など各自が興味を持ったことを調べ、テレビ番組の続編として制作する。そしてそれまでに制作した番組を1本のテレビ番組として編集する。最後に橋脚の島の児童を招待し、テレビ番組の発表会を持つ。

「瀬戸大橋」という地域教材に注目し、年間を通して様々な視点から学習していく一方で、学期毎にその成果をテレビ番組の制作という形にまとめながら、メディア制作としても様々な学習をしていく。小学校においては、中・高等学校とは違い、「情報」に関する必修教科はないが、この実践のように総合的学習の中で今日的課題に挑戦していく中で展開させていくのが、無理のない、理想的なケースとなるであろう。

(2) 総合的学習の評価

総合的学習には、常に評価の問題が付きまとう。従来のテストが実施される訳でもなく、はっきりとした理解度を測る尺度もない。

同校では、「学びの状況判断リスト」が利用されている。教師が、表現活動やグループ活動など、それぞれの状況でどの子供がどのように取り組んでいるかを観察し、コメントしていくものである。良いか悪いかという評価ではなく、「あの子はこうだった」というその個人にあった評価を行い、同時に支援することが出来たという。また、「学びのチェックカード」というものも利用されている。これは、主に興味・関心、学習意欲、思考力、友達との協調性、最後まで続ける粘り強さなどの観点から観察評価するというもので、総合的学習の過程で個人の人間性を見取るために工夫されたものである。その一方で、同じグループに属する子供たちに、お互いを評価させる「相互評価カード」も利用されている。「応援カード」といわれるこのカードには、他のチームがその取り組みや表現活動で、①力いっぱいできていた ②助け合っていた ③工夫していた ④特に頑張っていた友達（名前を書く） ⑤もっとこうしたらいいよ（アドバイスを書く）の5項目に分かれ、①から③については子供たちがよい・普通・もう少しの3ランクで互いを評価し合うものである。このカードで相手をその子供がどう見ているか、また自分が評価されることによってどのように学習態度が変わっていくかという変容を見取ることができる。

教師からの個々に注目する評価、観点別評価、また児童同士の総合評価と、他にもいろいろな評価の方法はあるだろうが、1つの評価法にとらわれずに多面からいろいろな形の評価がされていることが読み取れる。^{(9) 04}

2. 東京学芸大学教育学部附属大泉小学校

同校の総合学習は「新大泉プラン」ではほぼその完成がみられたのではないと思われる。この「新大泉プラン」は1995年度からの3年間にわたる文部省の研究委嘱による成果であり、「豊かな学力」の中核をなす学習として「総合学習」をカリキュラム内に位置づけたものである。

その特徴は、子どもたちの学力の中身を、3つの「知」と考え、整理したことと、「総合学習」における「3つの視野」を提案している点にある。

小学校における自己学習能力の育成をはかるためには、関心・意欲などの量的に測定できない機能的な学力の育成こそ真の学力と考え、その具現化を図るために、「生活や生き方に関わり、経験に基づき、道理や善悪などをよく理解し、物事を上手に処理する考え」を「知」と呼び、内容知（子ども自身は何を学ぶのか）・方法知（子どもはいかに学ぶのか、どう学ぶのか）・自分知（自分をどう生かすか、いかに生きるか）の3つの知で構想した。

総合学習では、体験に基づく子どもの実践力と実感力の視点から、

(ア) 国際（子どもの社会体験や文化体験から生み出したもので、多様な質をこえて互いの共通性・普遍性そして独自性を認め合うことを求める）

(イ) 環境（子どもの生活体験・自然体験から生み出したもので、主体的な価値選択を求める）

(ウ) 人間（自らの身体や心の体験から生み出したものであり、人間としての主体性、そして関わり合いを意識して、違いを認め合い創造的に自分を表現することを求める）

という3つの視野が考えられた。

このように「新大泉プラン」は「人間」の視野を土台に「国際」「環境」の視野を融合させ、低・中・高学年の2年サイクルのカリキュラム開発をめざし、各教科をも機能させながら、教科独自の価値を明確にした厳選カリキュラムを結実させているものである。

(1) 総合学習の推進

総合学習では、3つの視野「国際」「環境」「人間」をキーワードとし、「社会体験・文化体験」「生活体験・自然体験」「体と心の体験」等、子ども自身の体験的な活動を主として行われている。

総合学習のカリキュラム単元は下表のようにになっている。

(表5-3) 各学年における総合学習のテーマ (○印が重点的内容)

学年	年間単元名	時間数	国際	環境	人間
第1学年 総合学習 (広め)	学校を探検しよう	30	○	○	○
	ぼくのちゃほ、わたしのちゃほ	46		○	○
	アンニョンなかよくしてね	18	○		○
	えがおがいっぱい	10			○
	アンニョンいっしょに歌おう	18	○		○
	えがおがいっぱい ーへんしんしようー	14			○

第2学年 (広め)	1年生に紹介しよう	12			○
	大豆を育てよう・大豆を変身させよう	44		○	○
	ぼくってわたして・分身を作ろう	14			○
	コマブスムニダ韓国・日本の遊び	18	○		○
	世界はひとつ	18	○		○
	町たいけん・町名人	18		○	○
	コマブスムニダみんなで一緒に作ろう	16	○		○
	世界はひとつ	16	○		○
	ぼくってわたして・大きくなったよ	18			○
第3学年 総合学習 (深め)	お蚕様の糸をたどって	14		○	○
	大泉フリータイム学習	22			
	日本をとびだそう	13	○		○
	どうやって伝えようか	11			○
	富浦フリータイム学習	6			
第4学年 (深め)	富浦フリータイム学習	22			
	学校にトンボを呼ぼう	12		○	○
	おもちゃってなんだろう	14			○
	なにを使って食べる？	15			○
	箱根フリータイム学習*5年生へ継続	6			
第5学年 (深め)	箱根フリータイム学習*4年生から継続	22			
	びん、缶、ペットボトル君ならどれを選ぶ	14		○	○
	食の向こうに見えるもの	14	○		○
	自分らしさとは	15			○
	日光フリータイム学習*6年生へ継続	5			
第6学年 (深め)	日光フリータイム学習*5年生から継続	19			
	自分らしさー自分をみつめて	12			○
	*選択型総合学習	14	○	○	○
	(私と環境)				
	(世界の音楽をたずねて)				
	(世界の平和を求めて)				
	(男らしさ女らしさ)				
	卒業に向けて	15			○
	静岡フリータイム学習	10			

総合学習のカリキュラムは、大きくは第1、2学年の総合学習（広め）と第3学年～6学年までの総合学習（深め）とに区分され、低学年・中学年・高学年の2年サイクルのカリキュラム化が進められている。

低学年の広め学習では、直接体験を重視し、子どもたちの試行錯誤が充分補償されながら学習素材は教師が選択し、クラス単位で行われる。この広め学習の精神を受け継ぎながら、中学年の総合学習深め学習がある。中学年では新しく総合深め学習の中で28時間のフリータイム学習が設定されている。フリータイム学習は、野外での学習で、調べるテーマを自分で設定し、自分から働きかけ、追究する学習である。取り組みとしては学年全体で行われ、学年担任がTTを組み3～4つのテーマを担当する学習形態である。この学習は、上図のように3年～6年で実施され、フリータイム毎に事前の学習・現地の学習・事後の学習の3段階で展開される。特徴としては、前後の学年にテーマがまたがって、関連性をもたせ、2年サイクルのカリキュラムのよさを発揮している。高学年の総合深めでは、低・中での総合学習をふまえた上で、より問題解決中心の学習が展開され、6年の2学期からは今まで教師が選択していた学習テーマを各自が「国際」「環境」「人間」3つの視野から選択し、学習できる選択型総合学習を取り入れていることが特徴的である。⁰⁰

①総合学習（広め）低学年カリキュラムの特色

第1、2学年の総合学習（広め）は前表からもわかるように、「国際」「環境」「人間」3つの視野がすべて重なるように単元が工夫され、直接体験を重視した学習であったり、息の長い活動を含んだ学習である。例えば、1年生の5月上旬から3月下旬までの10ヶ月というほぼ1年の長期にわたり、直接体験である飼育活動の体験から「ぼくのちゃぼ、わたしのちゃぼ」46時間が展開されている。ねらいとしての3つの「知」は、以下のようになっている。

《内容知》・チャボには人と違う、チャボにあったくらしがある。

- ・チャボのくらしの中には、鳥の世界の厳しさや不思議さがあり、その中に誕生の喜びや死の悲しさを味わえる素晴らしさがある。

《方法知》・チャボと仲良くするために、自分から関わったり働きかけたりする。

- ・広く見たり考えたりするために、チャボをよく見つめ、立場をかえて考えたり、友だちと交流したりする。

《自分知》・継続飼育を通して自分のチャボへの関わり方が変わる。

- ・チャボに接することを通じて、自他の命を大切にしようとする。

2年生担任と密接なTTを図り、2年生にちゃぼと遊ばせてもらうことから、学習が始まる。2年生からちゃぼをもらい、ちゃぼ当番を決めたり、ひよこの誕生や、死から、対象をじっくりみたり、試行錯誤しながら活動を繰り返す時間が保証されているのである。低学年の総合学習は見通しのある追究をする中、高学年と比べ、より子どもの願いや試行錯誤が大事にされ、保証されているのが特色であり、その中での教師再度の手だてもかなり必要となってくる。

②総合学習（深め）高学年カリキュラムの特色

高学年の総合学習は、自分をみつめ、自分を理解することをねらい、自信をもって表現したり活動したりできる確かな意思決定力を培うことを目的としている。学習テーマとしては「国際」「環境」「人間」の視野から選択していく。

高学年では、問題解決学習がより児童に切実な問題となるような学習テーマの選択を考えなければならないので、素材選択の視点としては、児童自身の問題となりうるか、自己の追究が可能か、考えを深め合えるか、生活や生き方に響くかなどを明確にして単元の設定が行われている。特に6年生では児童自身がテーマを選択する選択型総合学習が取り入れられ、これまでの総合学習をより深めることが可能になっている。

例えば6年生の9月中旬～11月上旬の選択型総合学習において、4つあるテーマのうちの一つである「世界の平和を求めて」（12時間）では、以下のようにねらいとして3つの「知」があげられている。

《内容知》・自分が平和に暮らしている今も、世界では紛争や差別などあちこち起こっており、多くの人が犠牲になっていることがわかる。

《方法知》・世界中で起きている紛争や問題の現状や原因を調べるために、新聞やテレビなどから情報を選択し、継続して見たり読んだりする。

・世界中で紛争や貧困などで困っている人々を救うために、自分たちでできることを考えたり情報を集めたりしてできることから実行する。

《自分知》・自分たちの身の回りだけでなく世界の人々の生活にも目を向け、ともに平和に生きていこうとする。

この単元では子どもが理解できる範囲で世界各地で起こっている紛争などの状況とその原因を追究している。学習の工夫としては、自力で情報収集をしたり、実際に活躍する人の聞き取り調査を実施したり、直接・間接的にNGOで活動している人々の話を聞かせてもらったり、電話や手紙で調べている。その後報告会を実施している。最後には、自分たちが参加したり、できそうなことを見つけ、PTAで取り組んでいる難民の救助活動に関心が集まっていく。

このようなプロセスの中で、子どもたちは、自分たちにもできることが意外にもたくさんあることに気づき、生活や生き方に影響を与えているのである。自己の足元を見つめつつ、国際的視野で考え追究してこそ、自分の問題として実行し始めて、低学年の総合学習広めからより深い高学年の総合学習深めへと充実させることができる。この選択型総合学習をどう取り入れていくかがこれからの課題であるとともに一つのモデルになっている。⁶²

Ⅳ 選択学習

新しい学習指導要領では、選択学習を大幅に拡大し、「総合的な学習の時間」との間で時間数を増減できるようにしている。生徒に履習させる選択教科の数は、2年生は1以上、3年生

は2以上で、1教科当たり、選択授業の時間数の上限は、現行の年35時間から年70時間（2、3年）に倍増された。現在、多くの学校が、選択学習のカリキュラム開発に取り組んでいるが、その目的は、生徒の個々の興味や関心、学習の方法、理解度の違いなど、生徒の個性に対応するため、また流動的で複雑な社会で生きていく能力を育成することである。選択教科の学習方法は、一つの教科の枠内で、学習内容、学習方法を生徒に選択させる「選択学習」と、教科の枠を超えた「合科的選択学習」に区分される。それぞれ、追求課題の大枠が講座などとしてあらかじめいくつか設定されているものから、卒業研究に代表されるように、生徒が課題も自分たちですべて設定するものがある。また、生徒の多様な興味や関心を発展させるために、校内のティーム・ティーチングのみならず、外部から専門家を招くなどといったことに代表されるように、教授組織も多様化するであろうし、現に積極的に試行を行っている学校では様々な要素が見出せる。

今後は「教科」「選択」「総合的学習」をどう関連づけ、どのように区別されるのかが問題となってくるであろう。その手だてとして、本項では特に選択学習を積極的に取り入れている中学校を2つとりあげる中で、「教科」や「総合的学習」との違いを踏まえながら、選択教科の特徴を洗い出したい。また、次項においてはカリキュラム開発の視点から香川大学教育学部附属坂出中学校の合科的選択学習を取り上げているので、そちらも参考とされたい。

1. 滋賀大学教育学部附属中学校

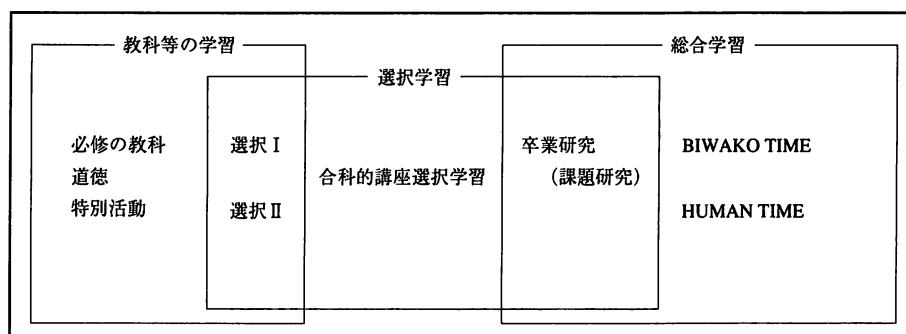
選択学習を実施し始めて、15年以上になる本校では、定着したものをもちながら、それでもなお修正、改善を加え、選択学習のモデルケースでありつづけており、同校の実践からは選択学習に関する様々な知見が見出せる。

課題解決学習を基本にした「選択学習」が、「教科等の学習」や「総合学習」を結び付けるものとして、また、選択学習内における各要素も系統的に位置づけられている（図6-1）。図において、左に行くほど教師の指導性が濃く、右に行くに従って、生徒の主体的な活動が多くなっているが、選択学習内においては「教科等の学習」や「総合学習」よりも教師の専門性が発揮できる場であるとして、それが生かされるような講座の設定が行われている。

選択学習においては、すべての生徒に必要な能力を育成するため、生徒一人一人に対する「指導の個別化」と、個々の生徒の興味や関心、意欲に対応していく「学習の個性化」を前提にして、必修教科学習の発展・応用的内容が学習されるものとなっている。選択科目と教科との関係は（表6-1）のようになる。1つの学習については20時間から30時間程度をつぎ込んでおり、2年生の前後期で選択Ⅱと合科的講座選択学習を、3年生の前期では選択Ⅰ、Ⅱを履修し、義務教育の集大成として後期に卒業研究に取り組んでいる。

同校の選択学習の例を取ってみても分かる通り、一口に選択教科と言っても、その目的、専門性、教科との関係、学習形態、教授組織などの観点から様々な形態がある。これら各々が独立していることはまずないが、それらの観点を踏まえて生徒の実状にも合わせて選択教科を位

置づけたい。⁽³⁾



(図 6－1) 滋賀附中の選択学習の位置づけ

(表 6－1) 滋賀附中の選択学習の種類

選択の種類	教科との関係
選択Ⅰ	国語、社会、数学、理科、英語の 5 教科の中から 1 教科選択
選択Ⅱ	音楽、美術、保健体育、技術・家庭、の 4 教科の中から 1 教科選択
合科的講座選択学習	講座 1－音楽・英語の合科 講座 2－美術・国語の合科 講座 3－保健体育・数学の合科 講座 4－技術・理科の合科 講座 5－家庭・社会の合科 の 5 講座から 1 講座選択
卒業研究	国語、社会、数学、理科、英語、音楽、美術、保体、技術・家庭の 9 教科の中から、中心教科として 1 教科を選択

2. 信州大学教育学部附属長野中学校

「個々の目標を大切に個性の伸長を図る事」を目的に、3 学年において 8 教科 10 講座の選択講座が、年間 35 時間設定されている。自分の意志で選んでいく学習展開を通して、判断力・意思決定力・責任を持った追求力、学習計画を立案する力を育成している。生徒はガイドブックに基づいてガイダンスを受けた後、自分の興味や関心に基づいて選択教科の講座を選択し、自分で追求テーマを決定し、個人またはグループで計画を立て、調査を進める。同校では、選択教科の内容改善が取り組まれており、選択講座は 8 つの「教科内選択学習」と 2 つの「合科的選択学習」で構成されている（表 6－2）。前者は、教科の学習で身につけた基礎・基本的内容をふまえて、学習の個性化をねらった専門的なものであり、例えば、「身近な数学」では、必修では習わない様々な定理を、既習の知識を生徒自身の発想を生かして発見・証明する中で自分の数学的課題を見つけるような試みがされている。後者は教科の特徴を残しながらも、

2つの教科にまたがったより現実に即したテーマを追求して行くものである。例えば、「国際理解講座」は社会科と英語科の合科授業で、地元長野で行われた冬季オリンピックをテーマに取り上げた学習である。共通テーマを2つ、「ルクセンブルグ」と「オリンピック」という異なる視点をおき、1年の半分ずつをそれぞれに当てている（表6－3）。英語で手紙を書いたり、実際に会って交流をしたりするといった英語の要素がある一方で、産業や、歴史に注目するといった社会の要素がある。そういった教科の特性を残しつつも、必修の授業では取り扱う事が出来ないような活動内容を設定し、興味のある生徒が自分で学習していけるようになっている。

（表6－2）附属長野中学校選択1996年度開設講座とその特徴

教科内選択学習	合科的選択学習
基礎・基本を踏まえた学習の個性化	教科にまたがるテーマの追求
古典・書道（国語科） 情報処理（技術科） 身近な数学（数学科） 混声合唱（音楽科） 器楽合奏（音楽科） 芸術（美術科） 総合体育（保健体育科） 金属加工（技術科）	国際理解（社会・英語科） 環境科学（理科・家庭科）

（表6－3）国際理解講座の共通テーマの内容とグループ分け

共通テーマ	ルクセンブルグってどんな国？	オリンピックの舞台でできること
グループの課題内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ルクセンブルグの人と文通交流しよう ・政治・経済・産業を調べよう ・自然・地形・気候を調べよう ・国旗を制作してみよう ・国家と言語を学習しよう ・伝統料理を作ってみよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリンピック選手と交流しよう ・オリンピックの歴史を知ろう ・NAOCの歴史を知ろう ・IOCのしくみを理解しよう ・オリンピック競技を体験しよう ・ボランティアに参加しよう

冬季長野オリンピックは共通のテーマで、国際理解教育の一環として、総合的な学習の時間においても取り上げられているが、そこでは教科の枠が取り払われ、生徒の追求テーマも多岐に渡っているという点で選択教科と区別がなされている。オリンピックを軸として各クラス単位で授業を展開させているが、1年C組では（表6－4）ようなテーマで展開されている。

これを見て選択よりも内容的に多岐にわたっているのは確かに理解できるが、事実、内容的に重なっている部分も出てきている（オリンピックの歴史など）。もちろん選択が3年生であるから同じ生徒が受講するわけではないので、細かいところは気にする必要もないであろうが、

選択と総合の内容の違いをどのようにして差別化を図っていくのが、ますます今後の課題となってくるであろうという一面が垣間見える。⁶⁶

(表6-4) 1年C組「オリンピックとパラリンピック」のグループテーマ一覧

オリンピックと長野の交通	オリンピックによる長野の変化
オリンピック後の施設利用	長野の交通と情報
オリンピック施設と環境問題	長野の自然と開発
オリンピックの歴史	パラリンピックとボランティア
パラリンピックと福祉	障害者の方に優しいまちづくり
オリンピックボランティアの活動	それぞれの人から見たオリンピック

3. 選択学習の特徴

以上、2中学校の選択学習の様子を見てきたが、前半に取り上げた滋賀大学教育学部附属中学校の選択学習のあり方から学ぶことは非常に多い。やはり1つとしては教科学習と総合的学習の橋渡しであるということである。現在の教科主義の強い中学校において、教科からいきなり総合的学習に飛んでしまうのはあまり現実的ではない。その間に選択学習を取り入れると、教科をエッセンスとして発展させた学習を試みることができ、しかも総合的学習の基礎となる学習ができるようになる。また、教科主義という背景においては、選択学習の中でも特に合科的選択学習が有効であるように思える。こうすることにより自然とTTを組むことができるであろうし、単一の教科では取り扱うことのできないテーマを学習することができる。このことは信州大学附属長野中学校の例においても見て取れる。

単一の教科選択においては教科の発展的内容や違った角度から、といった教科とは違った独自性のある学習（もちろん必修を踏まえた）、合科的選択においてはそれぞれの教科に関連するようなものでかつ、教科枠に閉じることのないテーマの広い学習、卒業研究は前者2つを独自性かつテーマの広さという観点において発展させた学習であり、1人1人に対応した学習を展開させることができるであろう。このように概観しただけでも選択学習のタイプは3つもあり、その役割も様々である。滋賀大学教育学部附属中学校のようにすべてにチャレンジするのは単純に考えてみても困難である。現に同校でもここまで20年近くの歳月をかけているのである。今後は各学校の実状にあわせて、こういった位置づけと目標を持って選択学習を行っていくのがポイントなるであろう。

V 独自のカリキュラム開発

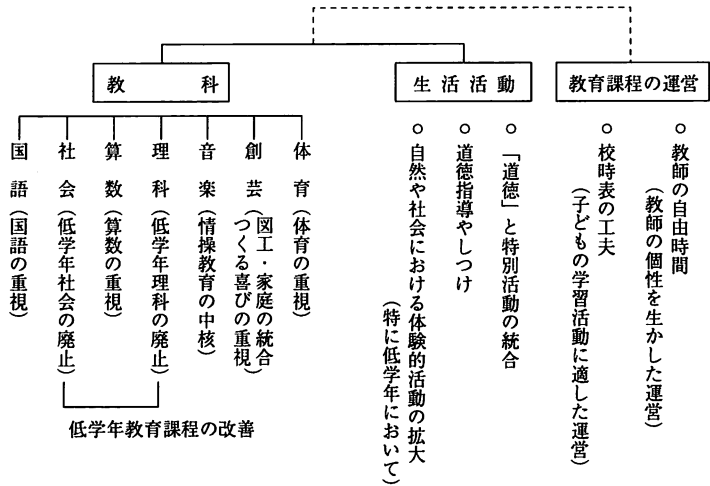
各学校によるカリキュラムの開発（School Based Curriculum Development）が、我が国で

もようやく現実性を帯びてきた。具体的には、地域や学校の特性を生かした総合的学習が、小学校から高等学校を通して新設されることと、その上に、中学校では選択教科を含めて、必修・選択・総合の3本立てになることなどが主に背景としてある。そういった様々なカテゴリについてはⅠからⅣまでにおいて全体の傾向と共に取り上げてきた。ここでは、教育課程全般を見据えて、独自なカリキュラム開発を行っている学校にスポットを当て、そこにおける注目点や、推進因について考察していきたい。

1. 新潟県上越市立大手町小学校

同校はこれまで文部省の研究開発の指定を3度受けて、その都度斬新な教育課程の開発に取り組んできた。文部省研究開発指定校は教科枠等の制約を受けない中での教育課程の開発になるため、ここでは同校のカリキュラム開発をそっくりそのまま適用はできない。しかし、同校のカリキュラムを歴史の流れにそって検討してみると、学校としてバランスよく独自色を出したカリキュラム編成になっていることがわかる。

まず、同校が1977年度から1980年度にかけて研究開発指定を受けた時の教育課程の編成を見てみたい。これは以下のようになっている。¹⁵⁾



(図 7-1) 1977年度から1980年度における教育課程編成

この教育課程の一番の大きな変更点は、低学年における社会科・理科の廃止である。これに図工と家庭科を統合しての創芸科を設置したこととあわせて考えると、現在の生活科のヒントとなっているといえよう。¹⁶⁾ 現にこの学校では、1988年度から1989年度にかけて、つまり現行の生活科がスタートした1992年度より先に、生活科の研究開発に取り組んでいる。

そして、1995年から1997年には更に抜本的な教育課程の開発を行った。これが「今日的課題にこたえる7単元群」と呼ばれているもので、教育内容のまとまり(教科)ではなく、子ども

自らが追求する学習活動の集合体（単元群）としてカリキュラムを編成している。（図 7－2）が 7 つの単元群と今日的課題にあたる図となる。今日的課題には、新学習指導要領に主要な観点や総合的学習において柱となるテーマが盛り込まれているのが分かる。また、現行の教科・領域を統合・関連・重点化させているのも大きな特徴であるが、教科との関係は（表 7－1）のようになる。

生活・環境	●	●	○	●	○	●		○	○	
言語	●	●		●	○					●
数量・図形	●					●				
総合科学	●	●		○	○	○	●	○		
創造・表現	●				○	○		○		●
身体・健康	●		●		●					
自分・集団	●		●	●	●				●	
	体験	情報	命	国際理解	人権・心	環境	内容厳選	選択	福祉	表現力

（図 7－2）今日的課題にこたえる 7 単元群

（表 7－1）単元群に含まれる従来の教科との関係

単元群	含まれる従来の教科
生活・環境	社会・理科・生活・家庭
言語	国語
数量・図形	算数
総合科学	社会・理科
創造表現	音楽・図画工作
身体・健康	理科・家庭・体育・保健・特別活動
自分・集団	生活・道徳・特別活動

以上が同校のカリキュラム開発の歴史的経緯であるが、何が変わってきているのか、という部分よりも、ここまでユニークな開発を行っている、むしろ何が変わっていないのかに注目したい。それは国語、算数を中心とした基礎の徹底といえないであろうか。（図 7－1）ではもちろんのこと、（表 7－1）においても各教科を 1 つずつの単元群に位置づけることで、それを如実に表している。では、そこにはどういった考えが加わり、実際にはどういった単元が展開されているのだろうか。

① 3年・言語単元群「インタビュー番組をつくろう」

この単元では、相手を理解し、自分が表現するというインタビューの特性を通じ、今まで理解と表現が別々に学習されることが中心であった授業において、それを一体化させたいという考えのもとに作られた。この活動を通して、コミュニケーション能力をつけたり、親しんでメディアを利用する中で、興味や関心を高めたり、自分たちが作った番組を見ることで普段気づかない自分に気づくといったことが目標とされている。

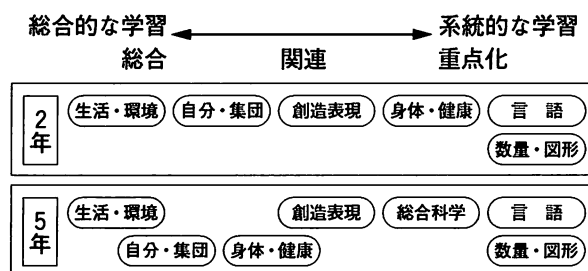
② 5年・数量図形単元群「お気に入りの石から…」

詰め込みがちになり、嫌いな教科の代表となる算数の授業を厳選し、教育内容を重点化し、量感や図形のイメージを大切にする中で、基礎・基本の徹底を図っている。同単元では、自然学習を拾ってきた石をきっかけに、石の大きさを比べるところから体積の概念を学んで学習を発展させていく。そこでは、積極的にTTを導入することで、個の学習のペースに応じた支援を図ることにしている。

その他、体育も身体・健康単元群の中心に位置付け、重視しているところや、道徳を自分・集団単元群に位置づけ、他教科とのクロスの中で実践するような形を取り、実践道徳を重要視している点も変わっていない。

長期間にわたるカリキュラム開発が同校の最大の特徴といえるが、これはすなわち同校も言うように、研究の系譜を生かしているということで、過去からの資産の承継がカリキュラム開発において必要であるということができるであろう。⁷⁷⁾

また、基礎・基本の一方で、同校でカリキュラムは総合的学習のヒントともなっているというのは言うまでもない。このカリキュラムは双方の関連を踏まえているともいえる。(図7-3)のように系統的な学習と総合的な学習を学年ごとにバランスを考えてとっている。



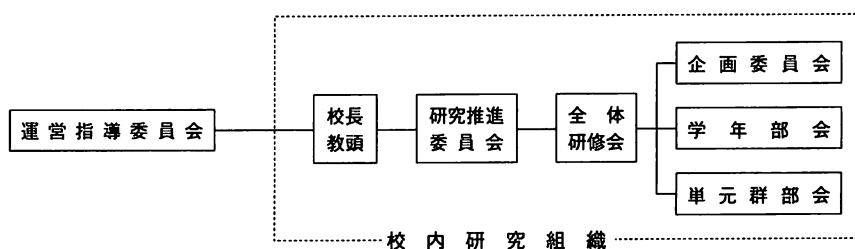
(図7-3) 単元群におけるバランス

	← 学習内容決定の範囲 →		
	単一教科	関連・融合	新課題
↑ 課題設定・学習展開の決定 ↓	教師決定 ・ ひびけ歌声 ・ ふしりレーを しよう		
	学習者選択 ・ ふしづくりに チャレンジ ・ こんなこと あったよ	・ 見つけた季節	
	学習者決定 ・ さがそう なかよしの響き	・ 遊びを広げて ・ たんけんソングを つくろう	・ ねえ見てわたしの ドリームワールド ・ 大好き 高田

(図 7-4) 単元におけるバランス
(3 年：創造表現単元群)

こうすることによって、時間割にとられわることなく、例えば春先には川へ行く時間を多く設定したり、冬にはきっちりと課題を室内でまとめるといった時間の弾力的な運用も可能となっている。また、1つの単元群においても、「課題設定・学習展開の決定」と「学習内容決定の範囲」から単元のバランスを取っている。例えば、(図 7-4) のように3年生の創造表現単元群の例では、単一教科の内容に準拠するものが多く、これまでの教科の流れを大切にしているということができよう。総合的学習は一步間違えると児童中心の経験主義のみのカリキュラムに陥りやすい。こういった研究は総合的学習のカリキュラム開発に知見を与えてくれるのではないだろうか。

以上のカリキュラム開発を支える研究体制はどうなっているのだろうか。(図 7-5) のように組織されており、ほぼ週1回のペースで何らかの研究会が開催されてきた。そこにおいて、カリキュラムの構想・実施にとどまらず、評価がきっちりと行われてきた。



(図 7-5) 大手町小学校の研究組織

研究組織において特に注目したい点は、運営指導委員会が大学の研究者など外部の人材によって組織されている点である。同委員会のメンバーばかりでなく、先の(図 7-4)などは村

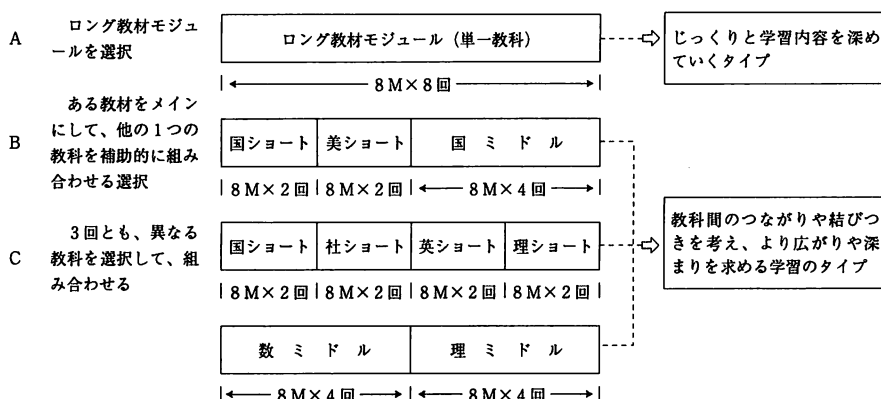
川雅弘・鳴門教育大学助教授との共同研究によって生み出されている。また、外部との連携、という点では幼稚園や中学校、PTAとの研究会も行っている。これは授業運営時に当たっての外部人材という資産にもなり得よう。もう1点として学年部会と単元群部会が両方存在する点をあげておきたい。最近の研究指定の3年間においても、研究主任を含む10人弱の教師の入れ替わりがあったが、カリキュラム開発が立派に継続されている点を考えると、管理職や研究主任のみのリーダーシップのみではなく、個々の教師の研究姿勢が見て取れる。以上のような様々な要因が絡むことによってバランスの取れたカリキュラムが作り上げられているのではないだろうか。^⑨

2. 香川大学教育学部附属坂出中学校

同校は、ほぼ20年前から「自由学習」という形で選択学習を実践・公開してきてきた。それから様々なカリキュラム開発を行っていくうちに、教育課程に「合科的自由学習」として位置づくようになり、異教科間TTで選択学習を行うようになってきている。2002年度より、中学校における選択幅が拡大することを考えると、同学校のカリキュラム開発のケースは非常に参考になるのではないかと考えられる。

基礎・基本の習得を目指す「共通学習」に対して発展的な学習を通して個性の伸長等を図る「自由学習」は1980年にスタートしている。当初、「自由学習」は単科の選択という形を取り、その中で今日的な課題への展開を考えていた。例えば、1986年度には、「中国の生活(社会)」「太極拳に学ぶ(保健体育)」といった具合に異文化理解の方向を目指した国際理解教育を行っている。

90年代に入ると、モジュール学習という独自の取り組みを行う中で、自由学習の位置づけが年を追うごとに明確になってくる。中でも、(図7-6)のような自由学習の教材モジュールの開発はその後の方向性を決める大きなきっかけとなったといつて良い。これに伴い、92年には複数教科の選択履修が可能になる教材モジュールが開発され、2教科の合科で8つのテーマによる「合科的自由学習」が開始された。そこから細かい改良が加えられ、現在に至っている。^⑩

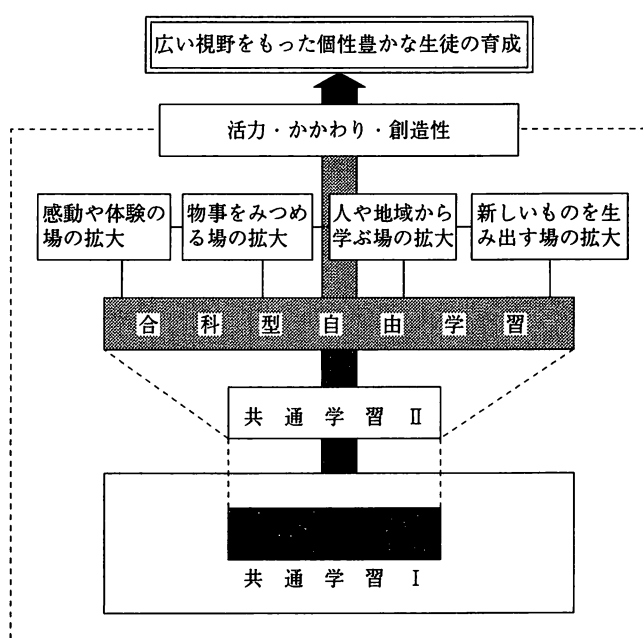


(図7-6) 自由学習の教材モジュール (1992年度)

こういった自由学習の経緯をカリキュラム開発の視点から見ていくと、次のような特徴が浮かび上がってくる。

①カリキュラム内における共通学習と自由学習の位置づけとそれぞれの関連

共通化を目指す「共通学習」と個性化を目指す「自由学習」という位置づけであったが、共通学習のそれがさらに明確となり、1994年度には教科必修により教科の知識、技能の定着に重点を置く「共通学習Ⅰ」、教科内選択により教科の学習において問題解決をすることに重点を置く「共通学習Ⅱ」というような位置づけになった（図7-7）。



（図7-7）1994年度のカリキュラム構造

そのようなカリキュラム開発により、「共通学習」と「合科的自由学習」の関連付けが明確となり、先の教材モジュールのように、「共通学習」より広がりや深まりが出る学習となった。また、「共通学習」に容易にフィードバックできる形がとれるようになった。

② 合科的自由学習のテーマ

教科を組み合わせた自由学習をテーマに設けることで、単一教科の選択学習では出来ない「学際的な研究」「本物志向の学習」ができる。この点を実行に移した中学校のトップを切ったのが同校である。なお、先には詳しくあげなかったが、テーマに関しては2年1サイクルの形を取っている。

この学習におけるテーマはどういった具合に決定されるのであろうか。9教科でマトリックスを作り、他の教科との合科で何ができるかを考えてもらい、それを提出させる（表7-2）。それに対し、優先順位をつけてもらい、その後は研究部が中心となって、指導者等も考慮に入れ、検討する。その中から全員が了承するものを最終検討案として、そこから各合科の準備に入っている。

テーマ内容に関しては1993年から2年に1サイクルで、例えば、1998年度では（表7-3）のようなテーマとなっている。1サイクル8テーマなので、1993年以降は24テーマが展開されてきた。それについて見たところ、同じ教科間の組み合わせは2つしかなく、また、その中でも教師の組み合わせまでが同じテーマは1つしかなかった。つまり、組み合わせが、ワンパターンに陥ることなく、様々なテーマが展開されている、ということが出来る。この点から、教師全員による協業体制ができているといえるのではないだろうか。

（表7-2）講座開設のためのマトリックス

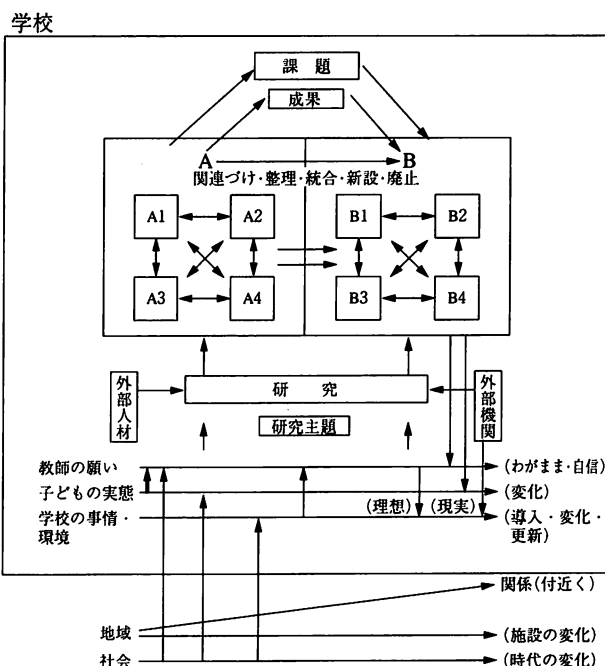
	国 語	社 会	数 学	理 科	音 楽	美 術	保 体	技 家	英 語
国語		・郷土の偉人伝を 書く ・讀物詩集を作ろう ・言葉でみる現代 社会	・数学で随筆しよ う ・数学の偉人伝を 書く	・古典にみる動植 物 ・自然を描写しよ う	・作詞、作曲から つくる世界 ・合唱曲をつくろ う	・言葉で探る美の 世界 ・詩集を作ろう ・オリジナルカル タを作ろう	・ボディ&スポ ーツランゲージ ・心によるスポ ーツシーンを再現 しよう	・道具と語るマニ ュアルづくり ・言葉と家庭生活 ・郷土料理のレン ジをつくろう ・ネーミング研究	・英語のひびき、 日本語のひびき ・日本の古典を英 語で表そう ・ネーミング研究
社会	・道の文化 ・古城を語ろう ・茶の湯・茶席の 楽しみ		・都市と橋の経済 学 ・統計で探る私た ちの生活	・瀬戸内の自然と 歴史 ・いい湯だな ・ことわざ迷宮を 検証	・生活と民謡 ・ハートフルシン ギング	・世界と時代の文 字絵と絵文字 ・日本読物紀行 ・風刺漫画を描こ う	・スポーツと生活 ・スポーツ ザ ワールド ・スポーツ社会学	・木造建築の味を 知ろう ・郷土食、世界の 食事を味わおう ・技は語る	・英語圏の旅へ出 かけよう ・コミュニケーシ ョン文化学
数学	・寺田寅彦研究 ・論理と数学	・香川将栄学 ・数学史を調べよ う		・瀬戸大橋の力学 ・理科のなかの数 学	・数学のドレミフ ァ ・ピタゴラスの音 楽	・香川のPRパン フレット ・空間図形をつく ろう	・スポーツを数学 で解く ・力測定で統計し よう	・香川のPRビデ オ ・日常生活に役立 つ数学の秘密	・調べてみようア メリカの中学数 学
理科	・文学の中の生物 を探る ・科学技術を伝え る	・生物と地理的条 件 ・くらしのサイエ ンス	・形態と科学 ・統計でせまろう サイエンス		・生物楽器をつく ろう ・サイエンス in ミュージック	・自然の美の追求 ・サイエンスグラ フティ	・スポーツを科学 する ・健康の追求	・科学で検証ア グリカルチャー ・生活の智慧を科 学する	・生物の学名を探 る ・サイエンスヒス トリー in world
音楽	・サウンドドラマ の創作 ・平家物語の世界へ タイムトリップ	・民謡をたずねて 歌おう	・音律の世界を体 験しよう	・タジラのうたを 聞こう		・私たちの名画の 旅：VTR作品	・ダンス音楽をつ くろう ・記録を高める音 楽を探ろう	・民謡楽器をつく ろう ・レニビを曲にし て歌おう	・ビートルズの世 界
美術	・絵本づくり	・絵地図づくり	・幾何学デザイン	・進化の秘密を探 ろう	・曲に合わせた映 像づくり		・スポーツ環境の 創造	・コンピュータグ ラフィックス	・外国の観光案内
保体	・スポーツ新聞を つくろう ・あなたもスポ ーツライター	・スポーツ ザ ワールド ・スポーツの歴史 を探ろう	・マスマスティッ クススポーツ ・スポーツを数学 で検証	・スポーツサイエ ンスの探 ・地球遊人	・ダンスと音楽のつ ながりを探る ・マクスゲームを プロデュース	・動きの美学 ・スポーツ環境の 創造		・アウトドアライ フ ・運動と栄養	・スポーツ ザ ワールド ・英語でスポーツ しよう
技家	・栽培マニュアル づくり	・石器づくりから 技術の進歩を探 ろう	・技術と数学の歴 史を探り、その 接点を探ろう	・道具の原理と科 学 ・栽培科学	・マルチメディア 音楽図鑑	・技術工芸品をつ くろう	・サバイバル生活 ・スポーツ用具を つくろう		・外国との文化交 換
英語	・文学作品にみる 世界の文化 ・外国の本を翻訳 しよう	・アジア発世界を 考える ・世界旅行を計画 しよう	・数の世界と文化 の違い ・世界の数の数え 方	・英国庭園から学 ぼう	・ビートルズを英 語で歌おう	・香川の紹介イ ラストマップ ・季節のカードを 外国に贈ろう	・スポーツ用語に みる文化の違い ・英語でレッツ シンキング	・ホームページを つくろう ・食文化を通じて 英語への旅	

テーマの中には地域を生かした素材が多い。例えば（表7-3）にも「ディスカバーふるさと・讃岐」などがある。合科的自由学習が開始された当初から、表のように何らかの形で、4

分野が設定され、その中の8つのテーマという形になっていた。この「分野」に関しても変遷はしているものの、「郷土」に関してはずっと設定されてきた。分野設定は「カリキュラム内容の固定化」という問題のために、1997年度からは廃止されたが、1997年度からのテーマにも「香川の未来学（社会・数学）」が設定されていることから、その考え方は続いているといえる。

（表 7－3）1998年度開設講座

自由学習・開設モジュール	教 科
1 21世紀に贈る創作絵本	国語・美術
2 日本語のなかの世界 世界のなかの日本語	国語・英語
3 香川の未来学	社会・数学
4 ジバング発異国見聞録	社会・英語
5 マスマススポーツ	数学・保健
6 緑の地球・共生プロジェクト	理科・技術
7 生活に役立つアイデア 製品を作ろう	理科・家庭
8 音・舞・マインド	音楽・保健



（図 7－8）カリキュラム開発の要因図

③カリキュラム開発の推進因

個別化・個性化教育の推進が初めから自由学習の基本的な考え方であり、その中から「合科的自由学習」が生み出された。課題や成果が常に出される中で、カリキュラム開発にフィードバックする流れが、大きい部分では2年に1度、細かな修正は1年ごとで、非常に短いサイクルの中で行われている。また、そういった積極的なカリキュラム開発をする理由としては、現在の社会情勢に擦りあわせるという意図もあるとも考えられる。1996年度からは生涯学習との関わりの中でカリキュラムの研究が始まっている。

もう1つ注目すべきは「モジュール学習」である。1単位時間のモジュール化に始まり、教材（教材モジュール）、学習集団（人的モジュール）などモジュールの対象や組み合わせを考えた考え方を、すでに1979年度から積み重ねてきている。

以上を踏まえて、カリキュラム開発の要因を示す図を描いてみた（図 7－8）。現行のカリキュラムが得た成果や課題が、次の新しいカリキュラムに様々な形で反映されるしくみを描いている。それには多くの要因を作用するが、学校内における要因のみではなく、学校外の要因も関わってくるであろうし、各要因間にも関係があるだろう。

文部省教育研究開発学校の指定を受けた学校は1976年の開始以来、多くにのぼるが、特定の合科・総合的学習や教科を1つ2つ開発するにとどまる学校が少なくない。それに対して、前項で取り上げた滋賀大学教育学部附属中学校、そして本項で取り上げた大手町小学校や香川大学教育学部附属坂出中学校などは、大胆なSBCDに正面から取り組み、それを実現するための教育システム－時間、スペース、教授組織、そしてカリキュラムの改革と開発を重ねてきた。そのために2度、3度と研究開発学校の指定を受けてきている。教育課程行政がともすれば上意下達に終わりがちであったわが国において、この文部省の教育研究開発学校の企画、それと真正面から取り組みつづけてきたこれらの学校の教育的遺産は大きい。

Ⅵ ティームティーチング

これからの総合的学習を本腰を入れて展開していくには、教授組織の抜本的な見直しを避けては通れない。異なった課題を、異なった速度、異なったメディアの組み合わせで学習したり、調査している児童生徒を、1人の担任教師だけで指導していく事は、物理的に不可能である。何人かの教師や専門家がチームを組んで、指導にあたる事が要望され、現に実践されてきている。ただし、小学校と中学校ではいささか事情も異なるし、外部からの専門家に指導を受けるのかどうかによっても、まるで別の結果になってくる。ここではそれらの中から、典型的な事例を、そして実際に参観した事例を多く引用する事につとめてみる。

1. 小学校でのティームティーチング

(1) 大阪府河内長野市立天野小学校

1998年の晩秋に天野小学校の研究実践報告会（三年次）に参加した。1996年度から3年間、文部省の教育研究開発学校の委嘱を受け、したがって現行の学習指導要領の拘束をはずした開発研究をしてきた最終年度での発表会であった。具体的には、小学校1年生から外国語（特に英語）会話を取り入れて、異文化理解教育をどのように進めていくかの事例を提供する試みが公開されたのである。新学習指導要領では、総則の中に、第3「総合的な学習活動の時間の取り扱い」を設け、特に外国語教育では次のような文言を記述している。「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等をおこなうときは、各学校の実態に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れしただりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」（小学校、P. 3）。研究委嘱校の一つである天野小学校は、こ

の時代課題についてどのような先導的試行をしたのか。

(ア) 外国人教師と本校教師との協力教授の様子

この学校にはPeter A.Ferguson（カナダ人の男性）が、英会話担当のNET（Native English Teacher）として配属されている。当日は彼の他に河内長野市内中学校のNETが3名特別参加したが、さらに地域在住の韓国人や中国人のボランティアの参加や指導も受けてきた。それと本校の教師（それもまた担任と支援教師とに分かれる）という複合的な協力教授システムをどの学年の学習活動においても見る事ができた。

NETの若い教師達は、いずれも指示が明確であり、テンポが速く、アクションを伴い、児童生徒の反応に対して、即時のKR（その結果に対する評価）を明示するなどの特徴を備え持っていた。日本人教師もこのテンポに合わせて教授行動をとるので、学習活動全体が、盛り上がるし、現代っ子の歌や活動のテンポにぴったり合う。全教科の授業をこういうテンポとアクションで教えるわけにはいくまいが、国語の授業でよくみかけるオーソドックスな文学作品の読み深めの授業などは、現代っ子にとっては、大正から昭和初期の流行歌を聞くような間延びした、退屈な感じであろうと思った。

しかもNETの若い教師達は、授業の組立や、表現の場の設定などにきわめて熱心で、本校の教師と何度も協議を重ね、役割を分担していた。全体会での講評や講演に移る前に、汗を流して本校の先生と一緒に、椅子を運び演台をしつらえている光景に、心打たれた。

(イ) 3年生で「違いを認め、友達になろう」という公開授業があった。これは異文化理解教育の本質を象徴したテーマである。

中国や韓国について、韓国料理や中華料理、民族衣装、生活・風習、漢字・ハングル文字、1から10までの数え方、等について、児童がグループで調べてきたことを発表し、ボランティアの人からも、助言、実演、指導を受けていた。お正月や家を新築したおめでたい時の料理、飾り物などで、日本のそれとの違いと共通点をはっきり理解させることに、担任教師が力点を置いていたのも共感できた。

その他の学級でも世界のいろんな国々のダンスをNETと児童とが共演したり、国旗比べをしてみて、キリスト教国の十字の形、イスラム教国のみどり色などの共通点を取り出していた。さらにまた国歌と国旗をマッチさせるゲームも取り入れていた。その一方では、ローラーホッケーのような新しいスポーツと、バスケットボールのような馴染みのあるものなどをNETの指導で体験したりもしている。異文化理解や体験学習をこのように広く取り入れているのにも注目したい。

(ウ) さて誰しもが注目する英会話の学習はどのように計画され展開されているのか。この学校ではLEE（Let's Enjoy English）の時間が中心になり、1年生から6年生まで、毎月学年

毎のテーマを決めて、実施してきた。低学年は週に1.5時間、中学年で3時間、高学年でも4時間程度である。その他にF-LEEといって（Foundation LEE）基礎を導入する時間も学年別に毎週設けている。LEEでは、例えばLMNやPQRなどで始まる単語のビンゴゲームをしたり、私の家族を紹介したり、日曜日の午後のスポーツから会話に入ったりというようにテーマを決めて、まさに英語のシャワーを浴びせたり、浴びせられたりする時間としている。

例えば5年生では「ビデオレターを作ろう」というテーマで、課題に応じた絵コンテを作り、せりふを英語にして、絵コンテスキットにし、練習を重ねて発表会をもち、それをまたビデオに収録し、編集をして、ビデオレターに仕上げるというような一連のプロジェクトが進行している。

このように各学年が開発してきた教材、例えばビデオやオーディオのテープとか、地図や模型とか、寸劇の衣装や舞台からビンゴゲームのカードや得点表に至るまで、実に様々なものがある。これらの多メディアを時と場面とによって、選択し、組み合わせて、効果最大になるようなメディア・サポート・システムとしていく必要がある。

私が現在勤務する学部に所属するアメリカ人で、イギリスで学び、スイスで勤務してきた多国籍の研究者・ノーマンD.クック教授が、先日も私をつかまえて「日本に来て5年になるが、日本人の英語が伸びないわけをやっと見つけたよ。なんでもかでも英語を見たり聞いたりすると、片っ端から日本語に訳す。英文和訳が最優先する気風。学校教育がその典型。ここをどう変えられるかが鍵だね。どう思いますかあなたは？」と切り込んできた。この天野小学校のLEE；英語を楽しむプロジェクト学習を、ぜひ彼に見せてやりたいと思っている。彼は人工知能の専門家であるが、どう反応するであろうか？

（エ）Tag Team Teachingの試み

1 単位時間の授業をとってみても、例えば3名の教師がいる場合のチームの組み方が、よく吟味されて実行されている。次ページ（図7-1）を見ていただきたい。

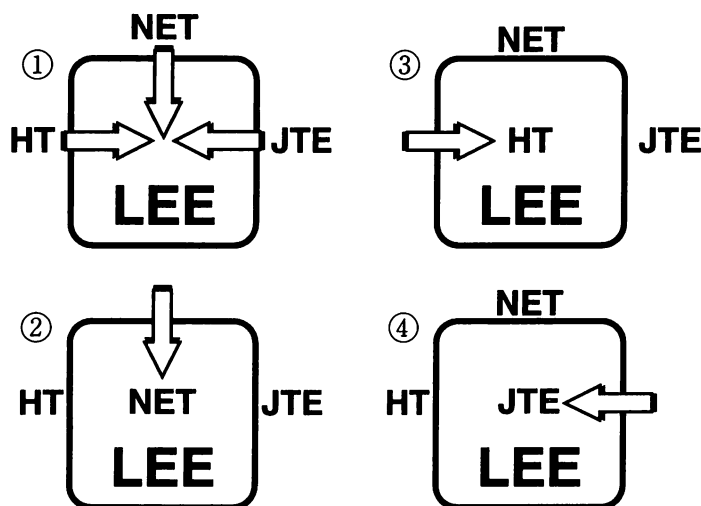
外国人教師（NET）、日本人の英語教師（Japanese Teacher of English-JTE）、それと学級担任教師（HT）が、タッチされたら交代するタグマッチに例えて、Tag Team Teaching（T.T.T.）と呼んできた。どの教師も瞬間的には主役になるという発想である。

①は、どの教師も「主」としてLEE（Let' t Enjoy English）の授業を進める準備があるということを示している。

②はNETが「主」になり、日本人の英語教師（JTE）と学級担任教師（HT）が「アシスタント」をする場合を示している。本校の特色である英会話学習で、英語のシャワーを子ども達に浴びせる場合に有効である。

③はHTが「主」になり、NETとJTEとが「アシスタント」を行う時間を示している。児童の興味・関心を生かした活動をしたり、生活指導や学級集団や小集団の学習に切り替える場合に用いる。現在ではこの形に重点を置いて、研究開発を進めつつある。

④はJTEが「主」になり、後の二人が「アシスタント」役を務める場合である。英語についての簡単な知識を説明するような場合に有効である。²⁰



(図 9 - 1) Tag Team Teaching (T.T.T.)

(2) 兵庫県三木市立瑞穂小学校

少し時間が遡って1995年秋、瑞穂小学校でも教育研究発表会に出席した。

毎年2～3回、2年間にわたって、校内での授業研究会に参加してきたが、その集約ともいえる研究会であった。校長を含めても教員は13名、児童数69名の小規模校である。しかし斬新なオープンスペースを持ち、教師同士は勿論のこと、外部の専門家とのチームティーチング、異学年交流授業、そしてクロスカリキュラムなどの思い切った手を打って、小規模校のよさを引き出していた。

外部の専門家とのチームティーチング

5年生の社会科では、外部の専門家と学級担任とがチームを組む形態を何回も見せてもらった。発表会の当日は、JA三木東から課長を招き、児童が質問してそれに答えてもらう形をとっていた。ぶどうの栽培では、どの時期にどんな工夫と注意が必要なのか。三木のぶどうは、全国の主としてどこに出荷されているのか。日本では主なぶどうの産地は、それぞれどのような特色をもっているのか。品種とか収穫時期とか主な販路などで。また自分たちで作ったぶどう暦を説明したり、生産者の工夫と消費者のニーズなどについて調べたことを発表して、専門家に意見を聞いたりしていた。²¹

以前に校内研究会で伺った時には、長距離トラックの運転手さんを学級に招いていた。ぶどうの他に酒なども東京方面に運んでいる人で、その学級に長男がいたと思う。その子にとって

は、外部講師が父親ということで、この日一日は、嬉しいやら恥ずかしいやら複雑な思いであつたろう。「運転しているときどんなことに一番気を使いますか？」という質問が出た。それに対して運転手さんはおよそ次のように答えていた。

中国縦貫道から名神高速に入り、一宮インターに近づく頃に一番気を使う。

東名高速で何か事故や渋滞が出ていないかの情報をとる。電光掲示板を見るのは当然だが、携帯電話を持つ前は、パーキングに入って電話を掛けたり、無線を聴いたりした。もしも東名高速で何か渋滞が出ていたら、小牧から中央道をとる。トンネルは多く長いが、この道をとれば約30～40分遅れで、東京に着ける。もっとも東京も場所によっては、この中央道を走った方が、速く楽に着けることもある。

大きな道路地図をたどって説明していたとはいえ、小学生には運転手さんの言葉は理解できなかったかも知れない。また児童から出た質問は、もっと別のこと、例えば睡眠や休息を十分にとるとか、速度を一定で走るとかを期待してのことであつたろう。しかしこの運転手さんの気苦労は、まさにプロならではのものである。運輸・交通・通信といったものが一体となって、現代社会を支えている。このことを自分の体験で語ってくれているのである。

現行の小学校学習指導要領では、5年の社会の内容を次のように述べている。この運転手の言葉と比べて頂きたい。

「わが国の運輸、通信などの産業の現状に触れ、それに従事している人々の工夫や努力について理解できるようにするとともに、国民生活を支えるこれらの産業の意味について考えることができるようにする。

ア わが国の陸上、海上、航空などの運輸業や主な貿易相手国と輸出入の品目などについて、地図や地球儀、資料などで調べて、我が国の運輸業の働きや貿易の特色について理解するとともに、これらの産業に従事している人々の工夫や努力に気付くこと。」

2002年からの学習指導要領では、放送、新聞、電信電話など、通信産業についての学習は、現行のそれを継承しているが、この運輸業などが削減されている。先にも述べたように、幹線道路網、鉄道幹線網、電信電話やWWWなどの通信網、マスメディア、これらは相互に支え合い、一体化して私たちの生産・消費活動を動かしている。時間が削減されたとか、分野が広がるとか、理由で、特定の通信産業だけに限定することは、いかながなものかと思う。これを受けた教科書では、現代社会の仕組みを理解させるものに仕上げられないだろう。

三木小学校の10名（男子8名、女子2名）に実体験で運輸業のプロが語ってくれた工夫や努力、これが今更ながら貴重なものに思える。そしてこの運転手さんと児童とのやりとりの仲介者、それを担任教師が務めていた。児童の立場で運転手に問いかけ、また運転手の立場から児童にわかる言葉で解説する。こういう仲介があれば、本物の学習は十分に展開可能である。ブドウや酒造の産業、長距離トラック輸送、高速道路網、通信網などのつながり、これをこそ学習させねば現代社会を学んだことにならない。このつながりが、合科や総合的学習で、さらに

そのつながりを増殖させていくべきである。

2. 中学校でのチームティーチング

(1) 教科担任間のTT

(ア) 中学校でのチームティーチングは、合科選択学習などでは、複数の教科担任が、チームを組む。香川大学教育学部附属坂出中学校などがその典型例である。「瀬戸大橋の秘密をさぐろう」では、数学と美術の教師がチームを組んでおり、その後このテーマを継続していく中で、理科の教師も加わっている。⁶²

(イ) またコンピュータ等を活用した授業の事例では、例えば大阪府松原市立第三中学校のように、音楽で作曲して演奏する場合に、音楽の担任教師と、情報教育主任（担当教科は社会）とがチームを組み、役割を分担して指導している例がある。同様に、美術や国語や英語など各教科の授業でも、その情報教育主任が、教科担当とチームを組むことで、各教科の特色を生かした情報教育が、学校全体で展開されていく形をとっている。

(ウ) 東京都文京区第六中学校では、技術科の教師が、コンピュータの利用形態、基本的な情報処理やタイピングの指導に当たり、国語の教師がCD-ROM広辞苑の使い方、ワープロを使った文章の要約・圧縮、文学史の資料づくりなどの指導をするというように、指導時間や場所を違えての役割分担をしている。

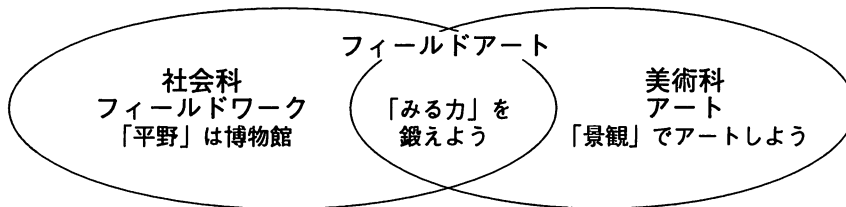
(エ) 大阪教育大学附属平野中学校では、社会科の教師が「フィールドワーク」、そして美術の教師が「アート」という二つの世界を対峙させ、郷土である平野を素材にした学習を展開してきた。（表9-1）に示すように異なる視点から。

その上で、（表9-2）に示すような単元構成をしている。結果として異教科の教師が協力したり、どちらかが主になり他方が補助に廻る形は、中学校の事例としては、むしろ主流である。しかしながらこの附属平野中学校の社会と美術のように、フィールド・アートという新しい分野の単元を開発するために、対等で、お互いの専門性を生かした事例は、きわめて稀であろう。教科の専門性を主張するならば、このような発想での開発研究が、中学や高校で展開される必要があろう。⁶³

(表9-1) フィールド・アートの視点

社会科・フィールドワークの視点	美術科・アートの視点
<ul style="list-style-type: none"> ○平野の歴史の人物探し ○どうして神を祭る所が多いのか ○町の中の昔の名残り・おもかげ ○お寺や神社はどういう環境のところに建てられているか。 ○公（おおやけ）の場所 ○老舗を探す ○日常使うもののからの歴史 	<ul style="list-style-type: none"> ○静かな所にあるものとわいわいがやしている所の環境の違い ○平野にある一番多いカタチ ○「景観」を乱すものは何か ○ロゴのかたち ○お地藏さんのお顔 ○町の色の調和 ○道を比べる

(表9-2) フィールド・アートの単元構成



《おもなねらい》			
<ul style="list-style-type: none"> ● 野外での観察・調査・表現活動を通してモノやコトを「みる力」を養わせる。 ● 1年生の選択授業で学んでいることがら（取材のしかた・聞き方等）を体験的活動に応用させることによって、より効果的、実践的な学び方を定着させる。 ● 役割を適切に分担し、協力して活動する力を養う。 			
1時間	<ul style="list-style-type: none"> ● 中世とはどういう時代か ● 歴史に登場する「平野」 ● 平野を舞台に登場する人物 	1時間	<ul style="list-style-type: none"> ● 景観の成因について探ろう ● 写真の記録性と芸術性 写真の構図・画面中の視線の流れ・背景と被写体のコントラスト
1時間	<ul style="list-style-type: none"> ● 環濠はどのように形成されたか ● 現在も残る環濠跡 ● 昔（近世）の地図と現在の地図の比較 	2時間	<ul style="list-style-type: none"> ● 写真の撮影方法を知ろう 手ぶれ・アングル・ズームアップやダウン・シルエット ● 風景を切りとる 抽象形・パターン・質 ● 景観の要因について探ろう
2時間	《課題設定》 <ul style="list-style-type: none"> ● グループ（5名）でフィールドワークの視点とアートの視点から発想を出しあい、さらに両者を統合するようなテーマを検討する。 ● 「平野の町づくりを考える会」のホームページで事前に見所を探る。 ● 企画シートにテーマ、コース、役割分担などを書く。 		
3時間	《フィールド・アート》 <ul style="list-style-type: none"> ● グループ単位で、昔、環濠があった地域を中心に（約1悦四方）、調査、表現活動（写真撮影）を行う。 ● 終了後、感じたことを400字にまとめる。 		
1時間	<ul style="list-style-type: none"> ● 平野で見たこと、聞いたことを素材に中世の学習の指導とする。 	1時間	<ul style="list-style-type: none"> ● 写真を整理し、グループのベストショットを選ぶ。
4時間	《インターネットで世界に発信》 <ul style="list-style-type: none"> ● 写真と取材したことをもとにして、平野を世界に伝えるための効果的な方法を考える。 ● 画像処理方法の習得とホームページの作成作業を実施する。 ● 情報のあり方（情報倫理）について討論会をする。 		

(2) 外部の専門家とのTT

滋賀大学教育学部附属中学校では、びわ湖学習に始まって、BIWAKO TIMEに至る「総合学習」が、すでに20年近くも続いてきたことについては、すでに先にも述べてきた。1998年6月の授業公開研究会では、12の分科会が、午前9時50分から10時50分まで、正味1時間開かれた。その特徴を要約してみると、どの分科会でも1～3年生の混じった班構成であること、春にスタートして、秋にまとめと発表会をもつこの総合学習の前半の山場、すなわち課題を決めてから、その研究計画を立てる段階で、専門家をゲストアドバイザーとして招いて、その計画などについての指導助言をうけていること、などがとくに注目したいところである。

各教科の担任教師は、それぞれの教室には別れて入って、招聘した専門家と生徒との質疑応答の仲介役を勤めていた。時には問題を提起し、また時には生徒を代表して専門家に質問し、また今後の調査のスケジュールを具体化していくように助言していた。教科の専門性にこだわることなく、生徒の問題意識や要望と、専門家の指導との仲介をしていくという新しい役割を、12名の教師達は見事に果たしていた。各分科会のテーマとゲストアドバイザーの肩書きだけを紹介すると

- ★滋賀の自然（滋賀県住宅供給公社 専門員）
- ★実態調査「相模川」（栗東自然観察の森 観察主任指導員）
- ★びわ湖の今を生きる人々（「湖国と文化」編集長）
- ★びわ湖に息づく伝統文化（滋賀県民族学会長）
- ★びわ湖の今、そして未来（滋賀県環境政策課 副参事）
- ★歴史の中の近江と滋賀県の未来（大津市歴史博物館 主幹）
- ★湖をもつ世界の国々の自然（琵琶湖博物館 学芸員）
- ★実態調査「GLOBE」（滋賀大学教授）
- ★湖とくらす世界の人々（国際湖沼環境委員会 事務局長）
- ★国際化する社会の中の私たち（園田女子大学講師、インド人）
- ★世界のさまざまな文化（元青年海外協力隊員）
- ★「地球」がかかえる諸問題（風景画家、イギリス人）

例えば最後の分科会等は、テーマが少し大きすぎるが、湖北地方に住み着いて、湖国の自然にとけ込んだ暮らしを独特のエッジングで描き続けてきたブライアン・ウイリアムズ氏が、「自然保護」という言葉が人間の思い上がりであることを、流ちょうな日本語で語りかけていた。自然は別に人間が保護しなくとも長い年月をかけて再生する回復力を持っているのに、それをぶちこわしてしまうのが人間である。保護され、隔離されるべきはそういう人間なのだと。

分科会には若干テーマの重複はあるが、さすがに「継続の力」を感じさせてくれた。例えば「BIWAKO TIME ワークブック」は79頁からなり、各生徒がこれを持参していたが、その中を開いてみると、学習の記録、基礎学習の記録、びわこ学習の進め方Q&A、パネルディスカ

ッションの進め方、等が盛り込まれており、17年間の先輩の学習や研究のエキスが、後輩に受け継がれていた。

この研究会のパネルディスカッションに参加した佐藤学・東京大学教授は、このように外部の講師を招くには、それなりの予算処置をして、計画的に招聘するとか、生徒が訪問して教えるを受ける必要性を説いておられた。市川市はすでにこの処置をとっているそうだが、ゲストの行為に甘えて、感謝状程度で済ませていたのでは、本物のプロジェクト研究を継続しては行けないだろう。

〈付記〉

この研究は文部省科学研究費助成基盤研究(B)(2)「マルチメディアリテラシー育成方法の検討」(代表：水越敏行)の一部である。

〈謝辞〉

貴重な研究物を送っていただいた上、当方からの訪問や質問にも快く応じてくださった各学校にお礼申し上げる。

[引用文献]

- 1 徳島県三加茂町立三庄小学校（1998）『研究紀要〈平成9年度報告〉』
- 2 大阪府松原市教育課程研究推進協議会・教育委員会（1998）『情報機器導入の手引き』
- 3 大阪府松原市立第三中学校（1998）『松原三中教育 No.13』
- 4 福井市立春山小学校（1997）『研究のあゆみ』
- 5 横浜市立本町小学校（1997）『みんながつくる学校』東洋館出版社
- 6 出口和生（1999）「マルチメディアプロジェクト学習でふくらむネットワーク」、コンピューター教育開発センター（CEC）『文部省・通商産業省新100校プロジェクト成果発表会 分科会事例発表資料』
- 7 田中博之（1999）「子どもたちはマルチメディアクリエイター～横浜市立本町小学校の実践に学ぶ～」、『NEW教育とコンピュータ』2月号、学習研究社
- 8 上越教育大学学校教育学部附属小学校（1998）『全国総合セッション要領』
- 9 香川県坂出市立坂出中央小学校（1997）『研究紀要（第1年次）』
- 10 香川県坂出市立坂出中央小学校（1997）『研究紀要』
- 11 東京学芸大学附属大泉小学校（1998）『豊かな学力の育成を目指した教育課程』
- 12 東京学芸大学附属大泉小学校（1998）『総合学習－新しい知と学びの創造』教育出版
- 13 滋賀大学教育学部附属中学校（1998）『研究紀要第40集』
- 14 信州大学教育学部長野中学校（1996）『教育研究のあゆみ』
- 15 小島冠治（1984）「教育課程の評価」、水越敏行・梶田勲一編著『授業と評価ジャーナル』4、明治図書
- 16 水越敏行（1998）「カリキュラムの評価～選択学習や総合的学習を中心に～」『総合的学習の理論と展開』、明治図書
- 17 新潟県上越市立大手町小学校（1997）『平成9年度活動報告・実践集録』
- 18 新潟県上越市立大手町小学校（1998）『新しい教育課程ににじ色の夢』、日本教育新聞社
- 19 香川大学教育学部附属坂出中学校（1997）『生涯学習につながる合科的自由学習の実践Ⅱ』
- 20 大阪府河内長野市立天野小学校（1998）『小学校の英会話・総合的な学習の授業公開並びに研究実践報告会（第3年次）』
- 21 兵庫県三木市瑞穂小学校（1995）『「光るまなざし あふれる意欲」～個性が輝く学習活動、学習環境オープン化の取り組み～』
- 22 香川大学教育学部附属坂出中学校「合科的選択学習の実践」教職員配置改善研究会編集『教師のためのティームティーチング実践事例集』ぎょうせい
- 23 井寄芳春・中堂元文『「知の総合化を支える活動の場を求めて」～フィールドワークとアートを軸にした単元の構想と実践～』、第10回松下視聴覚教育研究賞 応募論文